

仙遊遺跡発掘調査報告書

— 旧練兵場遺跡 仙遊 I 地区 —

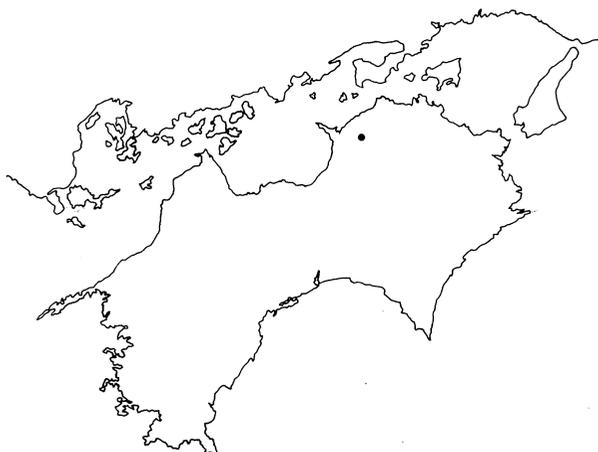
1986年3月

善通寺市教育委員会

せん ゆう

仙遊遺跡発掘調査報告書

— 旧練兵場遺跡 仙遊 I 地区 —



1986年3月

善通寺市教育委員会

刊行にあたって

仙遊の里から、'仙遊' ということばにふさわしい夢が、うつつの世に花開いたのです。タイムトンネルをくぐって来たように、弥生人の、ふくよかな笑顔が、今の世に、ほほえみかけたのです。

驚愕と喜悅——その錯綜する感動のうずまきの中で、しごとに携わったもの、しごとを支えたもの、そして、しごとを見守っていた多くの人たちは、ただただ歴史の神秘に声をのみました。

古代への限りない追慕と、脈々と流れる民族のいぶきに心はずませながら、発掘へのいきさつ、発掘の仕様、そして、目覚めた弥生の顔などについてまとめることにしました。

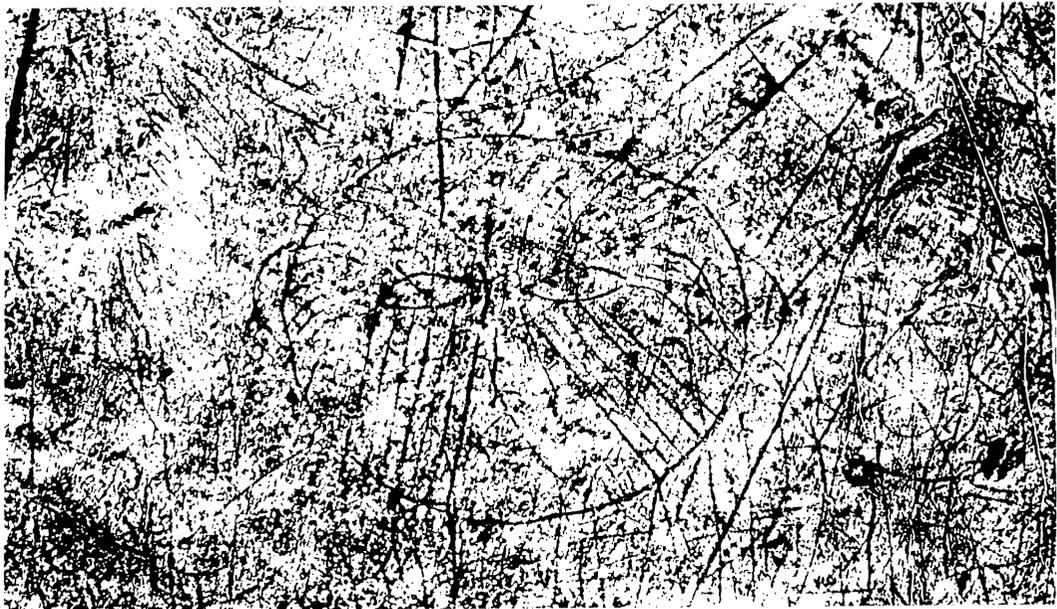
こんどの発掘に当って、ほんとうにご親切にご協力下さった大木真彦さんに、関係者一同心からお礼を申し上げる次第です。

また、ご指導下さった先生方、ご支援下さった多くの方々にも、この誌上をかりて、感謝の微衷を捧げるものです。

この小論が、現代と古代をつなぐ夢多き文化探索に多少でも役立つことができれば、望外のよろこびです。

昭和61年 3月31日

善通寺市教育委員会教育長 佐 柳 正



箱式石棺の蓋石に描かれた弥生人の顔・拓本を反転(1/2)

例 言

1. 本書は、香川県善通寺市仙遊町一丁目680番地67に所在する、旧練兵場遺跡仙遊Ⅰ地区（仙遊遺跡）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、善通寺市教育委員会が主体となり、昭和60年7月15日から同月25日まで行った。
3. 調査の実施及び本書の作成は、善通寺市教育委員会文化振興室・笹川龍一が担当した。
4. 発掘調査に際しては、矢原高幸氏と土地所有者である大木真彦氏から多大の御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

目 次

第一章 遺跡周辺の地理と歴史	1
第二章 調査に至る過程	5
第三章 調査の概要	6
①箱式石棺墓	7
②箱式石棺の線刻画	12
③小児壺棺墓（SK-01~03）	21
④出土遺物	22
第四章 ま と め	24
図 版	26

第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の空海が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山善通寺の門前町として発達している。東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから構成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壌は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、最近の五条遺跡などの発掘調査では、この下層土中に縄文時代後期頃の土器片が包含されていることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する雨霧山。西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれており、古くから信仰の対象であったことがうかがえる。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し、気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間文化の開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡



第1図 調査地周辺遠景

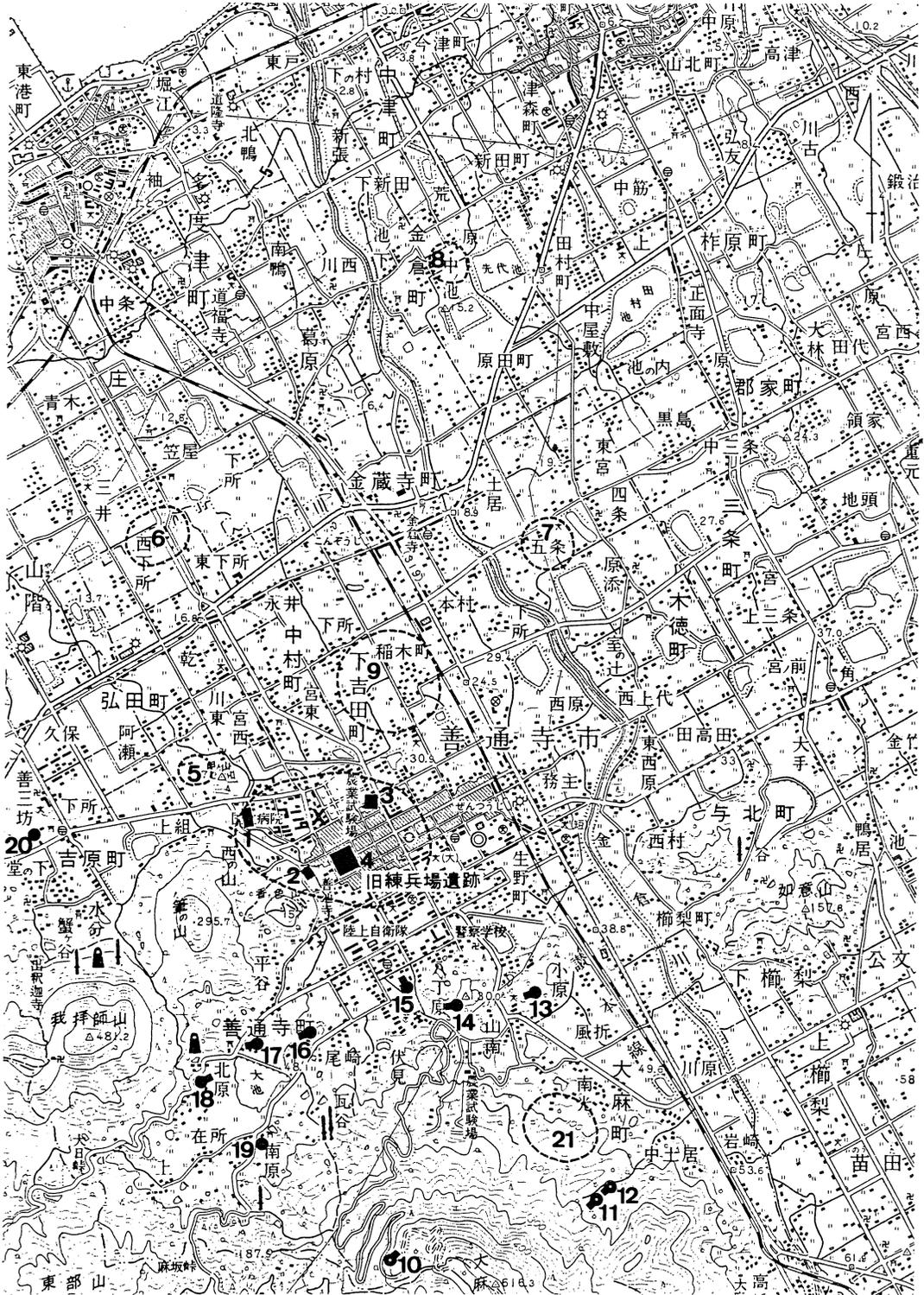
にかけて存在する三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時期の遺構群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、前期の古段階の特徴をもっている弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものが出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在もまったく不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。弥生時代の丸亀平野では、主要河川の支流が縦横に存在していたようであり、これらの遺跡群は河道と河道の間に形成された自然堤防上に立地していたと考えられる。また、現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mコンタあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。

丸亀平野南西部の山添いでは、金倉川と弘田川にはさまれた微高地上に、香川県を代表する弥生時代の中核的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。ここでは昭和30年頃に四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児用土器棺十数点と多数の土器・石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に、国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉が出土したことなどから、遺跡は弥生時代前期から後期、さらに古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であることが知られている。仙遊I地区（仙遊遺跡）は、この四国農業試験場と国立病院にはさまれた住宅地に所在する。

旧練兵場遺跡推定域で行われた発掘調査では、これまでに、昭和52年の善通寺西遺跡で弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・櫛などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大や古い溝の廃絶に伴った祭祀が行われたことが、昭和58年の仲村廃寺では白鳳時代に建立された寺の土壇の他、弥生時代後期末頃の竪穴住居が確認されている。そして昭和59年には仙遊遺跡から西に500m程の彼ノ宗地区で河川改修に伴う発掘調査が行われ、弥生時代中期から後期末にかけての竪穴住居約40棟を中心とした集落跡が確認されている。

これらの遺構群は、丸亀平野における弥生文化の発生から発達の過程を考える上で、極めて重要な資料であるといえる。

- | | | | | | |
|----|--------|-----|---------|-----|-------|
| × | 仙遊遺跡 | 8. | 中ノ池遺跡 | 16. | 王墓山古墳 |
| 1. | 彼ノ宗調査区 | 9. | 稲木・石川遺跡 | 17. | 菊塚古墳 |
| 2. | 善通寺西遺跡 | 10. | 野田院古墳 | 18. | 北原古墳 |
| 3. | 仲村廃寺 | 11. | 大麻山椀貸塚 | 19. | 宮が尾古墳 |
| 4. | 善通寺前寺 | 12. | 大麻山経塚 | 20. | 青龍古墳 |
| 5. | 甲山北遺跡 | 13. | 磨臼山古墳 | 21. | 南光古墳群 |
| 6. | 三井遺跡 | 14. | 鶴が峰四号墳 | | |
| 7. | 五条遺跡 | 15. | 丸山古墳 | | |



第2図 調査地と周辺の主要遺跡 (1 : 50,000)



また、善通寺市内では与北山の陣山遺跡で平形銅剣3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅剣2口・細形銅剣5口・中細形銅銚1口の計8口、我拝師山遺跡では計3箇所から平形銅剣5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡を本拠とした集団との関係も注目されている。

古墳時代に至ってもこの地の勢力は衰えず、市内だけでも400基を越える古墳が存在し、中でも筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳の集中する地域として有名である。

まず積石塚としては、大麻山椀貸塚・経塚、野田院古墳、大窪古墳などの前方後円墳が知られているが、中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦地という全国的にも有数の高所に立地する、丸亀平野で最古段階の前方部盛土後円部積石塚である。有岡地区には同一系譜上の首長墓群と考えられる六基の前方後円墳が確認されており、北東から南西にかけて遠藤塚・鶴が峰・丸山・王墓山・菊塚・北原古墳の順で並んでいる。古墳時代後期では、宮が尾古墳に代表されるような、線刻画で装飾された古墳が八基確認されているなど、様々な点で興味は尽きない。

この頃この地域では佐伯氏が豪族として勢力をもっており、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺（仲村廃寺）や善通寺の前寺があるが、いずれも旧練兵場遺跡内に建立されている。そして、古代文化の中枢であったこの地は門前町として繁栄を続け、現在に至っている。

参考文献

- | | | |
|--------------------|-----------|----------|
| 「善通寺市史・第一巻」 | 善通寺市 | 1977年7月 |
| 「善通寺市の古代文化」（矢原高幸著） | 〃 | 1973年11月 |
| 「新編香川叢書・考古篇」 | 香川県教育委員会 | 1983年3月 |
| 「中の池遺跡発掘調査概要」 | 丸亀市教育委員会 | 1982年3月 |
| 「五条遺跡発掘調査資料」 | 善通寺市教育委員会 | 1983年11月 |
| 「仲村廃寺発掘調査報告書」 | 〃 | 1984年3月 |
| 「彼ノ宗遺跡発掘調査報告書」 | 〃 | 1985年3月 |

第二章 調査に至る過程

昭和60年7月14日、埋蔵文化財について日頃より御世話になっている矢原高幸先生から、仙遊町一丁目において工事中に箱式石棺が発見されたとの一報を受けた。現場は仙遊町一丁目680番地67、大木真彦氏の住宅建設予定地で、既に基礎工事のための掘削が完了しており、箱式石棺はこの北東隅に、蓋石と西側石が取り除かれた状態で露出していた。

箱式石棺は、この地方特有の板状節理をなす安山岩が用いられたものであるが、比較的大きな石材が使用されているようにも思われた。注意深く観察したところ、まず北側石内面の上端に、細い線で陰刻された直線と弧線を組み合わせた図形が認められた。図形の延長線は石棺内の埋土で隠された部分にまで及んでいたため、堆積状況を確認しながら埋土を一部取り除いてみたところ、石材一面に、明らかに人の手による線刻画が姿を現わした。箱式石棺の床面には、石棺石材と同様の安山岩を小さく砕いた板石が敷き詰められていたが、線刻画はこの面より下にまで及んでおり、これが箱式石棺が組み上げられる以前に描かれたものであると判断できた。そして、残る石材についても調べてみたところ、いずれにも、床面下にまで及ぶ同様の線刻画があることが確認できた。

また、箱式石棺墓の掘り形内には多量の弥生土器が包含されており、弥生時代の遺構ではないかと考えられた。箱式石棺に線刻画が描かれた例は他に無く、しかもこれが弥生時代のものとするれば極めて貴重な資料であることは言うまでもない。この重要性を考え、大木真彦氏に工事の中断を申し入れ、翌日から緊急に調査を開始した。



第3図 仙遊遺跡調査区位置図

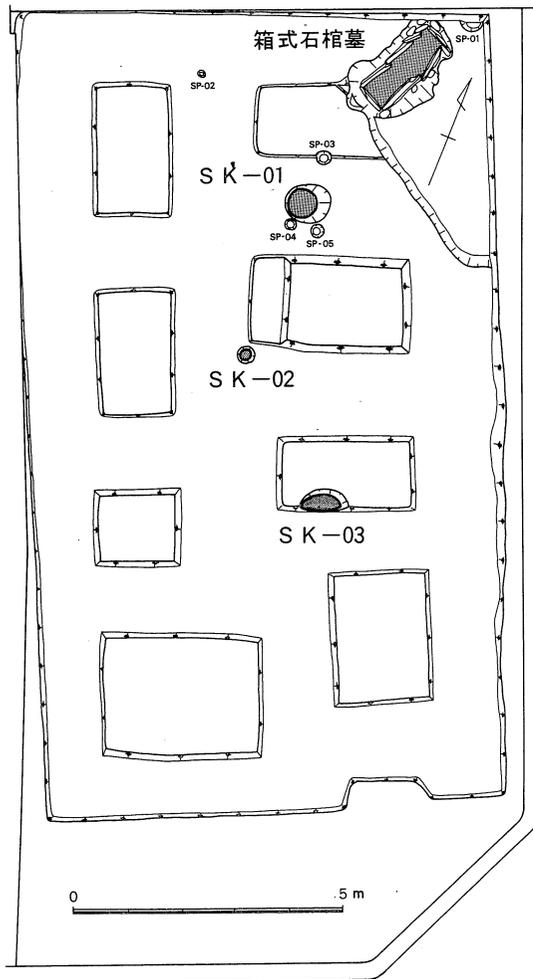
第三章 調査の概要

調査対象区内では、既に遺構面下にまで達する掘削が縦横に完了していたため、特にグリッドは配置せず、掘削部分の底部と各壁面を精査することで、遺構の確認と土層の堆積状況の観察を行った。結果、箱式石棺墓の他にも、小児壺棺墓3基と数個のピットを検出することができた。

ここでは地表に、以前あった木造家屋建設時の整地層と考えられる花崗土層が露出しており、この下に暗黒色粘性土層が厚く堆積していた。北壁面を中心に土層の堆積状況などを観察したところ、箱式石棺墓坑や小児壺棺墓坑、ピットなどは、全てこの暗黒色粘性土層上から掘り込まれたものであることが確認できた。従って、これらの遺構が構成された時点での遺構面は既に削平されてしまっており、当時の地表面は現在の地表面とほぼ同じ位の高さではなかったかと考えられる。

当調査区を含めた南北に狭長な範囲は周辺と異なり、旧練兵場遺跡推定域の中央部分であるにもかかわらず、遺物が殆ど出土せず、旧河道部分ではないかと考えられていた。暗黒色粘性土層の下は地山（黄褐色砂質土層）となっているが、この面が調査区内では西から東に向かって傾斜し下っており、やはりここからすぐ東側に旧河道の存在が考えられる。これらのことから、ここに集落からややはずれの旧河道添いに形成された墓地が想定できる。

また、調査開始と同時に、掘削工事を行った業者に箱式石棺周辺の掘削時の様子を聞き、その時点では蓋石や西側石が全て存在し、床面にも全体に板石が敷かれていたことが判った。そこで掘削部分の土砂の廃棄場所を確認するとともに、その廃土置場でも平行して作業を行い、箱式石棺石材と、多くの弥生土器を回収した。廃土置場には多量の土砂があった



第4図 遺構配置図

が、小児壺棺の破片と考えられる大型の土器片以外の弥生土器は、箱式石棺石材の周辺にのみ散布しており、北壁面の土層観察の結果などと併せて、箱式石棺墓の掘り形内にあった遺物ではないかと考えられる。

回収できた箱式石棺石材は直ちに発掘調査現場に持ち帰り、西側石については、その抜き取り跡が鮮明に認められたため、もとの位置に戻し石棺を復元することができた。残る石材のうち数枚の大型の石材については蓋石と考えられるが、これらについては、その置かれていた位置や裏表については残念ながら説明することができなかった。この他にも10~30cm程の石材が数多く回収できているが、これらについては箱式石棺床面に敷かれていた底石や掘削時に大型の石材から剥離したもの他、石棺を作る際に余った石材も含まれているようである。このことについては次の項目で詳しく述べることとする。

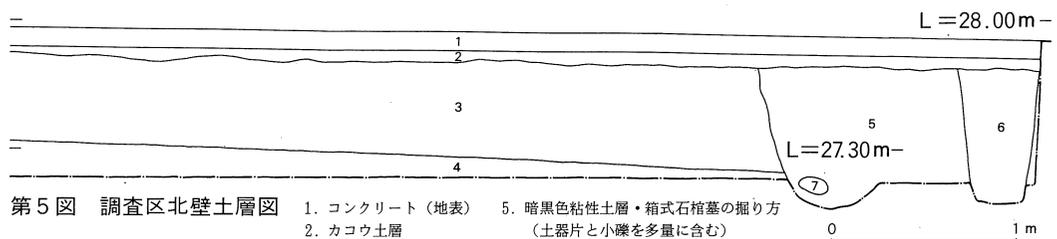
① 箱式石棺墓

(註)

箱式石棺の構造は、頭部側に立派な石材（以下、額石とする）を置き、これを挟むように左右に板石を立て、次にその石材の下端を挟むように、逆八字形に外側から板石を立てている。そして最後に、脚部にあたる側に額石と同様の石材（以下、脚石とする）を置いてはいるが、左右の板石の北端と脚石との間が西側で15cm、東側で6cm開いており、それぞれ河原石（砂岩）で補充されている。この石材の不足から、被葬者の身長に合わせて、最初に額石と脚石の位置が決定され、額石側から両側の板石が順に立てられたものであることがわかる。この石材の不足については、単純なアクシデントであったように思われる。また、箱式石棺の外側には15~25cm程の河原石が数個認められたが、石棺石材の不足を補った2個を除いて、全て板石の固定のために用いられているようである。

石棺の大きさは内側で、南北に172cm、東西は額石部で53cm、脚石部で43cm、最大幅は中央からやや北寄りで60cmを測る。小さく砕かれ床面に敷かれた安山岩の底石も、その重なり具合からみて、基本的には額石側に置かれた一番大きな石材（60×35cm）から、脚石に向かって順に敷かれている。

線刻画は額石では内面と外面、そして東側端面に認められる。脚石では内面と外面に、



第5図 調査区北壁土層図

1. コンクリート（地表）
2. カコウ土層
3. 暗黒色粘性土層
4. 黄褐色砂質土層
5. 暗黒色粘性土層・箱式石棺墓の掘り方（土器片と小礫を多量に含む）
6. 暗灰色粘性土層・SP-01
7. 箱式石棺石材

東側額石寄りの石材では内面と外面と下側端面に、東側脚石寄りの石材では内面と外面、そして内面の線刻画の延長が南側端面にまで及んでいるのが認められる。西側額石寄りの石材では内面にのみ、西側中央の石材では内面と外面と上側端面に、西側脚石寄りの石材では外面にのみ線刻画が認められる。

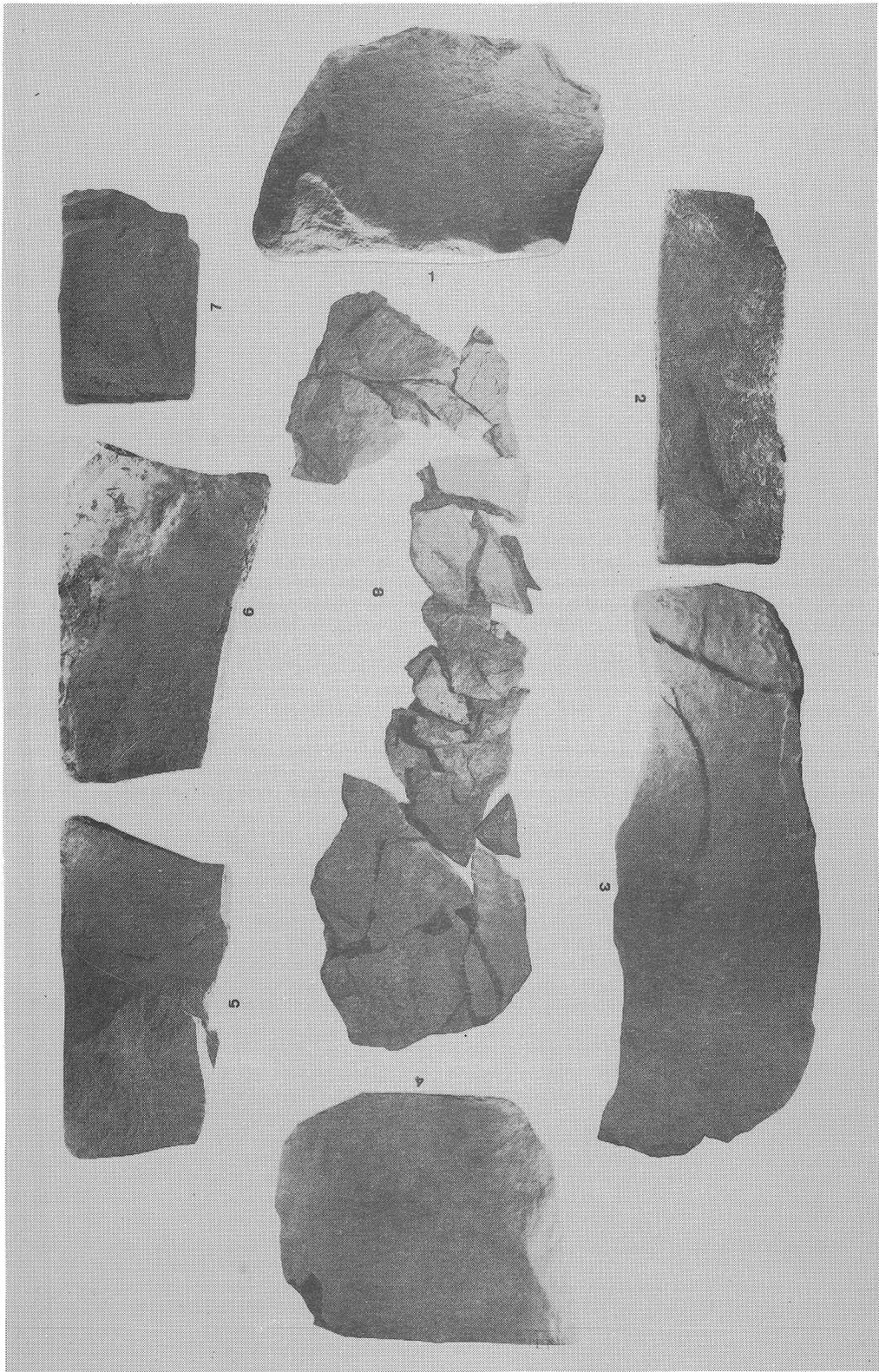
蓋石としては大型の板石が5枚回収されている。(第8図参照)石材9は両面に、石材11は片面にのみ線刻画が認められる。石材10-A・B・Cは掘削時に一枚の板石が剝離したもので、B・Cについては接合が可能であり、剝離面も新しい。また石材10-Aを含めて、廃土置場から回収された石材のうち、石材10-B・Cと同質同色のものも多数あり、線刻画が認められる破片も数点認められる。石材10-B・C以外はまだ接合できていないが、他の石棺石材の状況などからみて、この石材にも線刻が施されていたとみて良いと思われる。

石棺の床面に敷き詰められている底石もその殆どが同質同色を呈しており、接合できるものも多数ある。恐らくは一枚の石材であったものではないかと考えられるが、よく観察すると、もとの石材には破砕される前に線刻が施されていたことが判る。廃土置場から回収された石材とあわせて、現在接合を試みている。

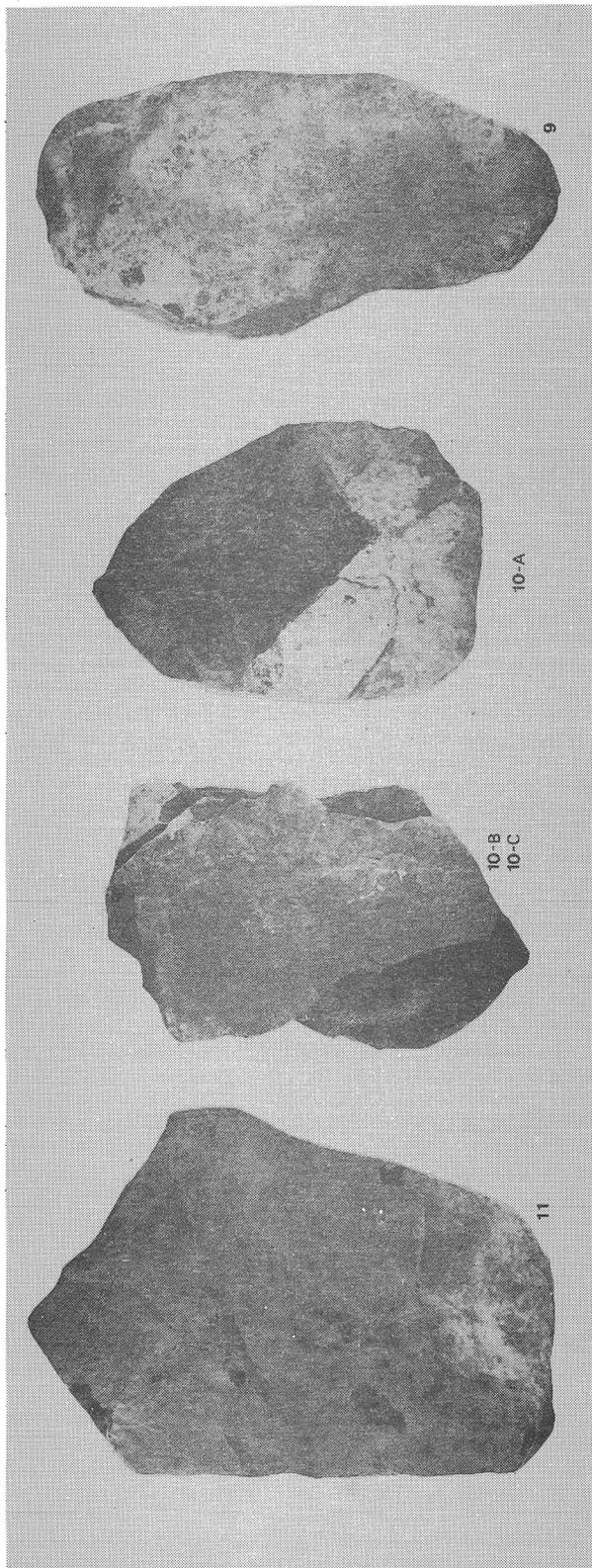
箱式石棺石材は東側に2枚・西側に3枚、いずれも横に長い石材が上面を揃えて用いられている。この部分の掘り込みは浅いが、南側の額石と北側の脚石のみ他の石材と比べて大型の石材が用いられているにもかかわらず、いずれも極めて平坦な面を内側にして、その上面を東側・西側石の上面と揃えるために地中深く掘り込まれ設置されていた。このことから、少なくとも額石・脚石については計画的に設置されているようであり、この部分に描かれている線刻画については、位置的・方位的な性格づけも考えられる。

遺構は調査区の北東隅で検出されたため、箱式石棺墓全体については不明であるが、その掘り形は石棺の大きさと比べて非常に大きく底部は平坦である。箱式石棺は、この掘り方の西壁添いを更に深く掘り込み、頭部を南に向けるように設置されているようである。箱式石棺東側に認められる平坦部は、遺構が深かったためにわずかではあるが掘削をまぬがれており、ここからは比較的残りの良い弥生土器が多数出土している。石棺内には副葬品等は全く認められなかったが、掘り形から出土した埋め戻しの際に供献若しくは混入したと考えられる弥生土器は後期後葉のものばかりであり、箱式石棺墓の構成時期を示すものと考えられる。

石材5の内面は石材6の外面と接合でき、いずれの剝離面にも線刻画が認められるが、その剝離面は変色しており、石棺石材として採集された時点で、既に剝離していたか亀裂が生じていたようである。また、石材2の外面は石材7の外面、そして石棺東側の平坦部から出土した石片とも接合できるが、これについては剝離面が新しいこと、剝離面には線刻が及んでいないことなどから、底石同様に、線刻を施した後に加工したものであると考



第7图 1号箱式石棺石材(展開状態)



第8図 1号箱式石棺石材(蓋石)

えられる。

線刻画はこの箱式石棺が組まれるより前に描かれているが、どの段階で施されたのかということについては明確にできない。しかし、線刻が施されている石材表面は軟質であるにもかかわらず、移動時の傷や磨耗が認められない。このことと、これまでに判明している内容を併せて、線刻画は葬送儀礼の一環として、被葬者を取り囲む石棺石材に呪術的な意味を持って刻み込まれたものであり、その作業は石材採集後、棺材として手を加える直前に墓坑付近で行われたものではないかと考えられる。

(註)

「普通寺の古代文化」普通寺市・1973
 この中で矢原高幸氏は市内の箱式石棺を、石材の組み方によって三様式に分類している。また、頭部にあたる石を額石、足部を区切る石を脚石としており、これに従った。

② 箱式石棺の線刻画（掘削工事の際に生じた傷などは除外してある）



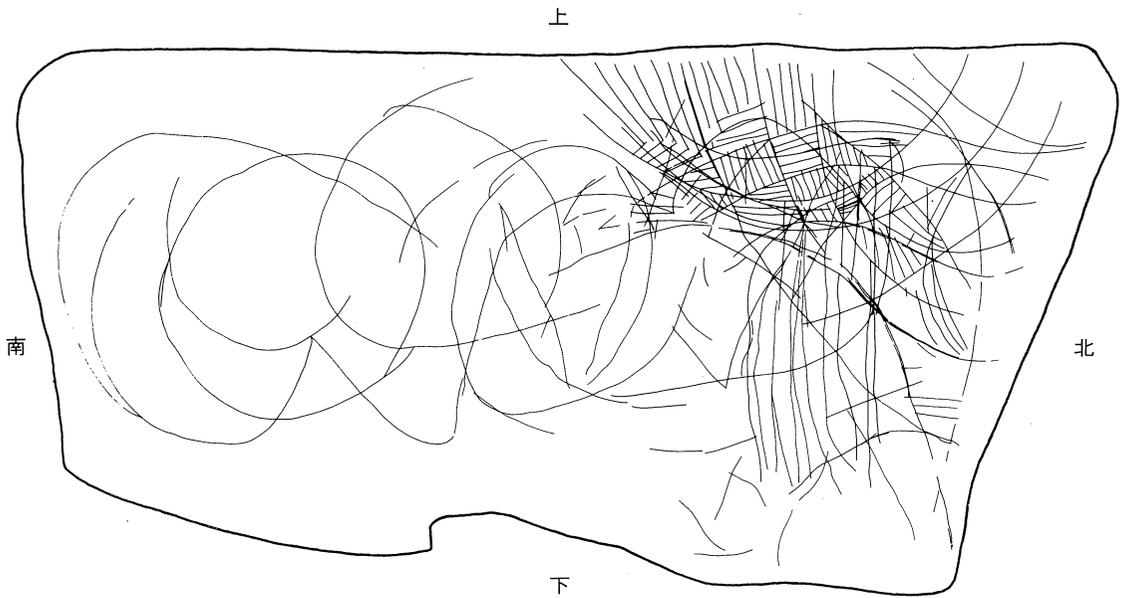
第9図 石材9の線刻画実測図（ $\frac{1}{5}$ ）



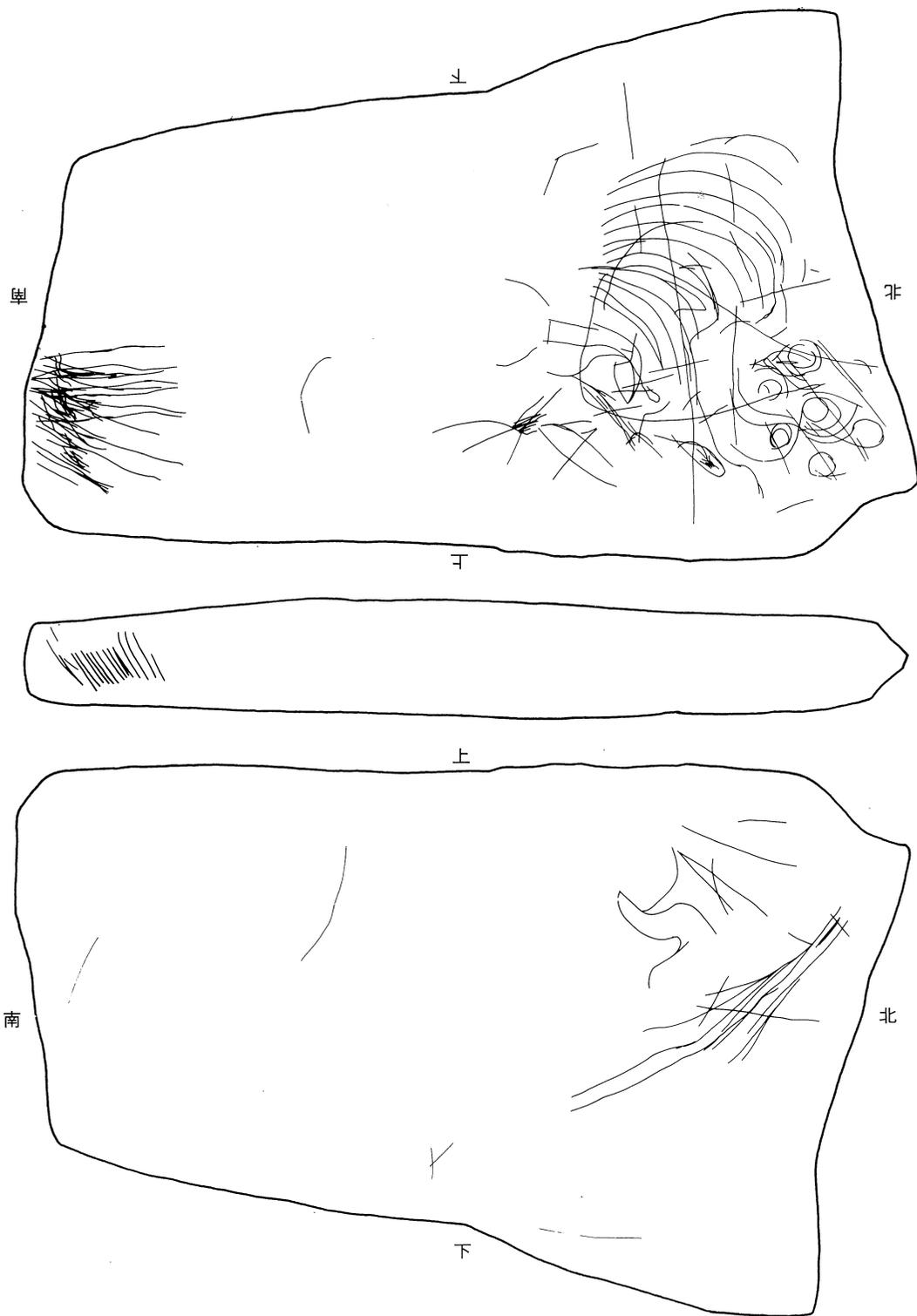
第10図 石材9の線刻画実測図 ($\frac{1}{5}$)
(第9図の裏面)



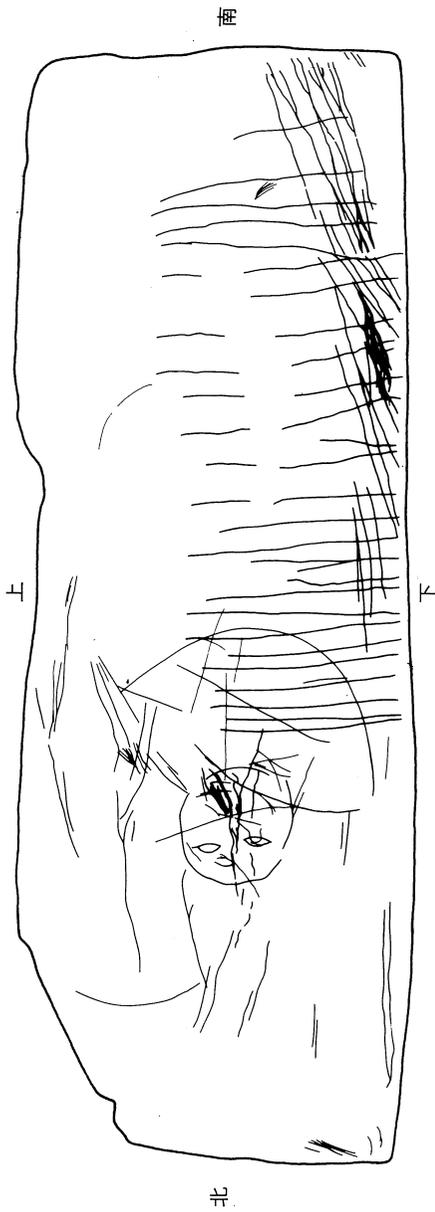
第11図 石材11の線刻画実測図 (1/5)



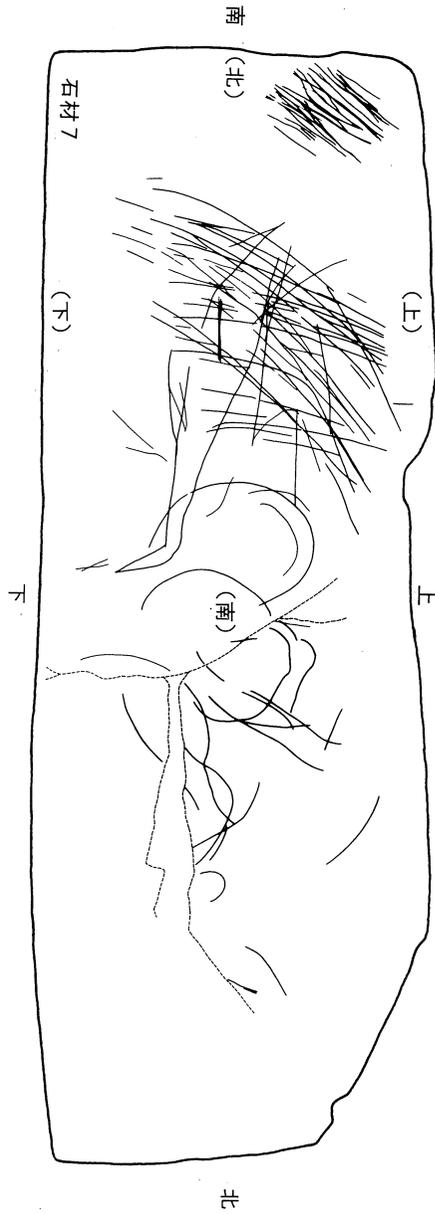
第12図 石材5内面の線刻画実測図 (1/5)



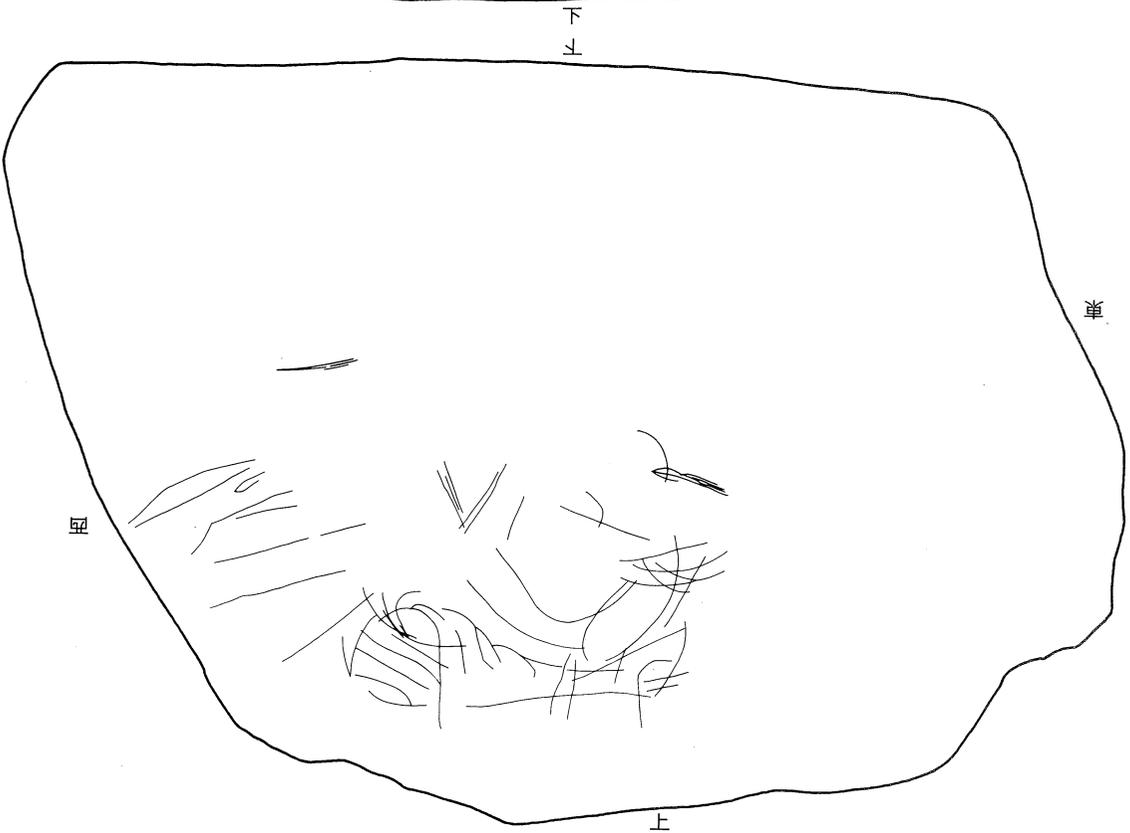
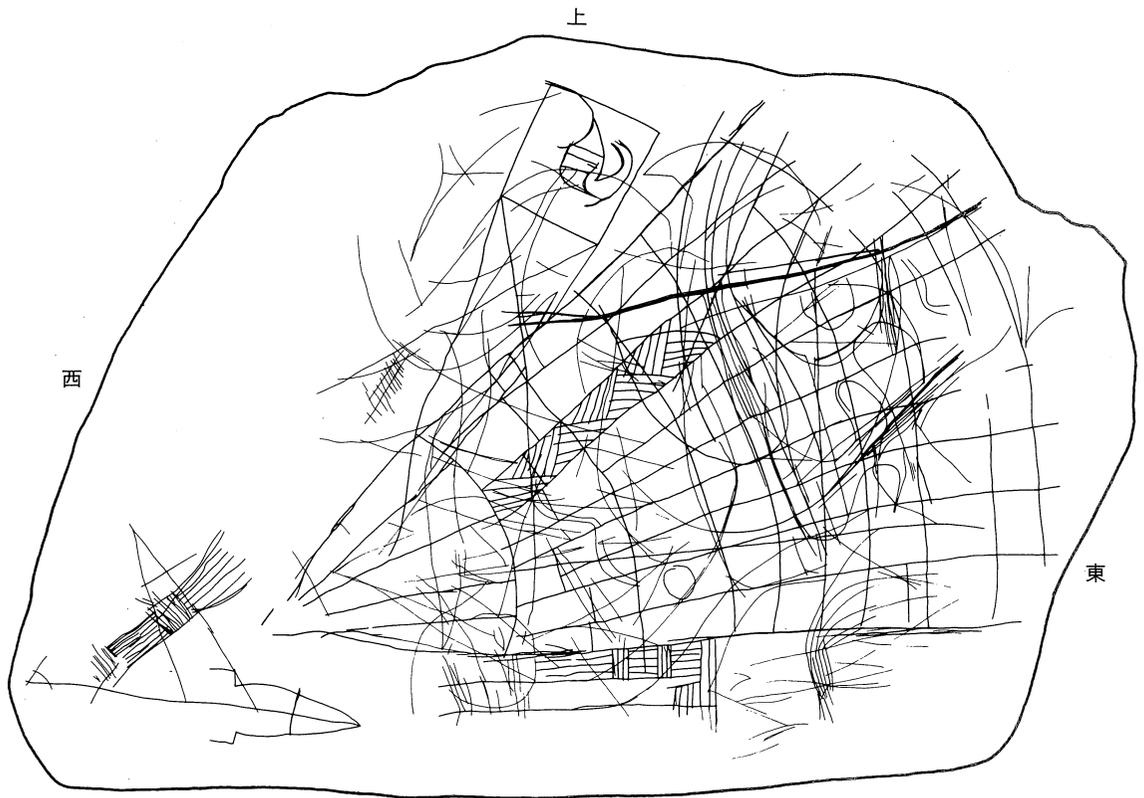
第13図 石材6の線刻画実測図・上から外面、上面、内面 (1/5)



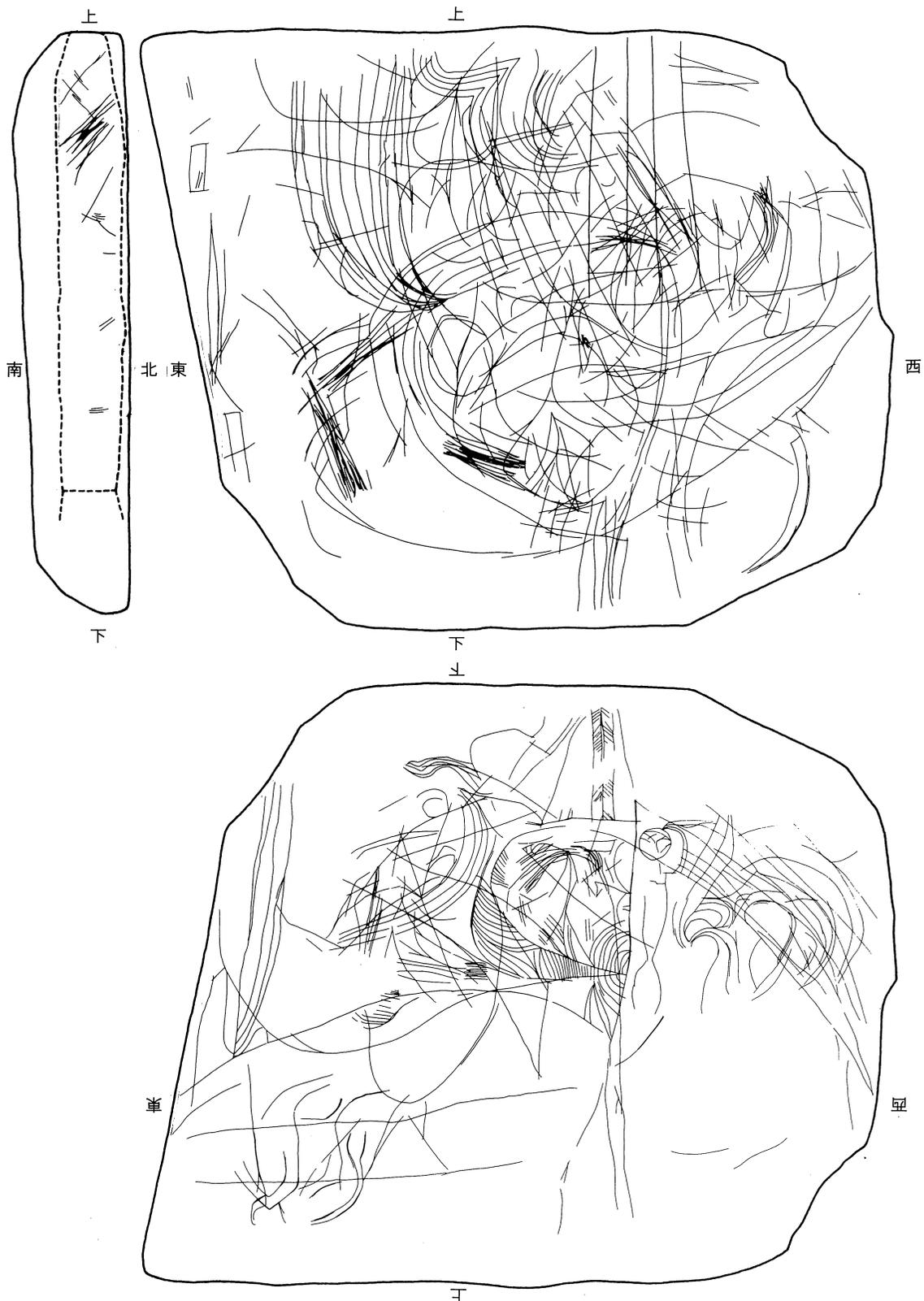
第14図 石材2内面の線刻画実測図 (1/5)



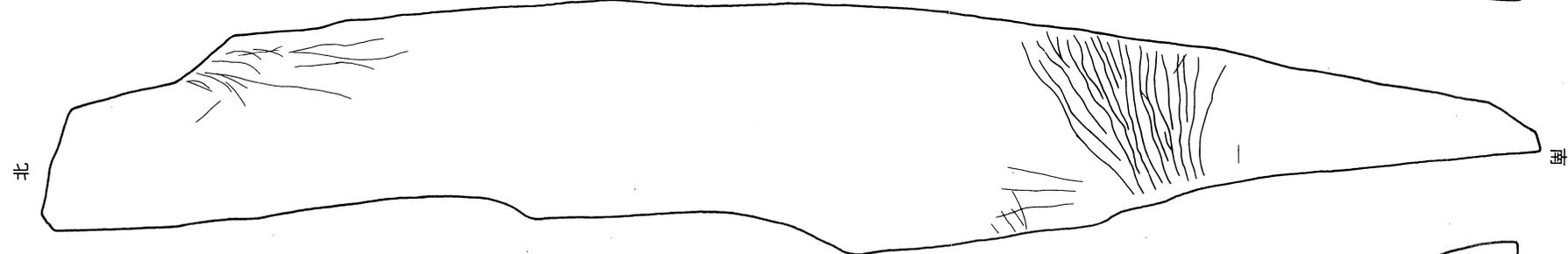
第15図 石材2外面と石材7外面と掘り方出土の石片の線刻画実測図 (1/5)
(破線は接合部分を示す)



第16図 石材1の線刻画実測図・上から内面、外面 ($\frac{1}{5}$)



第17図 石材4の線刻画実測図・上から内面、外面 ($\frac{1}{5}$)

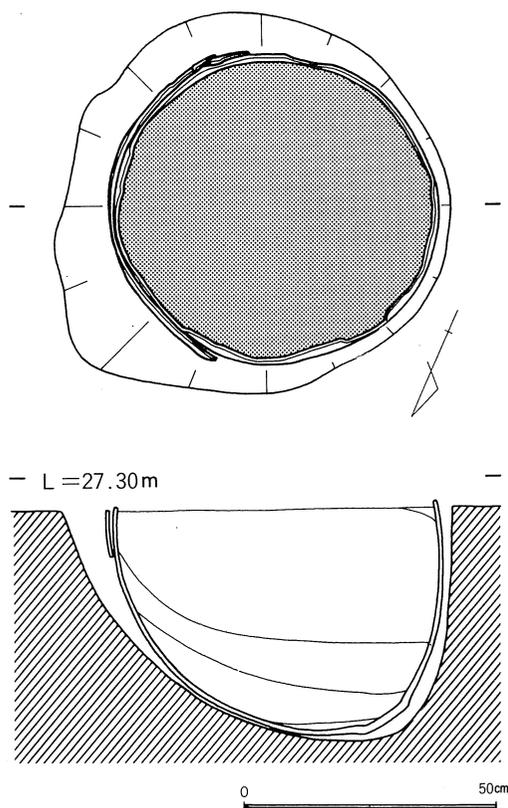


第18図 石材3の線刻画実測図・上から内面、下面、外面 (1/5)

③ 小児壺棺墓

小児壺棺墓は調査区内で3基検出され、その墓坑は全て箱式石棺墓坑と同様に、暗黒色粘性土層上から掘り込まれていることが確認されている。1号小児壺棺墓(SK-01)は、墓坑が地山面下約50cmまで達していたためにやや残りが良かったが、2号小児壺棺墓(SK-02)の墓坑はかろうじて地山に達する程度、3号小児壺棺墓(SK-03)の墓坑は地山に達しておらず、いずれも掘削時に遺構の大半が失われており、詳細な資料は得られなかった。

SK-01・SK-01の壺棺は中心軸が 31° 、N- 66° -E方位に傾いた状態で、壺棺よりやや大きい程度の墓坑に埋納されていた。壺棺は体部しか検出できていないが、最大径が63cm、体高が推定73cmと比較的大きなもので、その形態は、最大径を体高の中央よりやや上に持ち卵形を呈しており、底部が丸味を帯びた平底であること



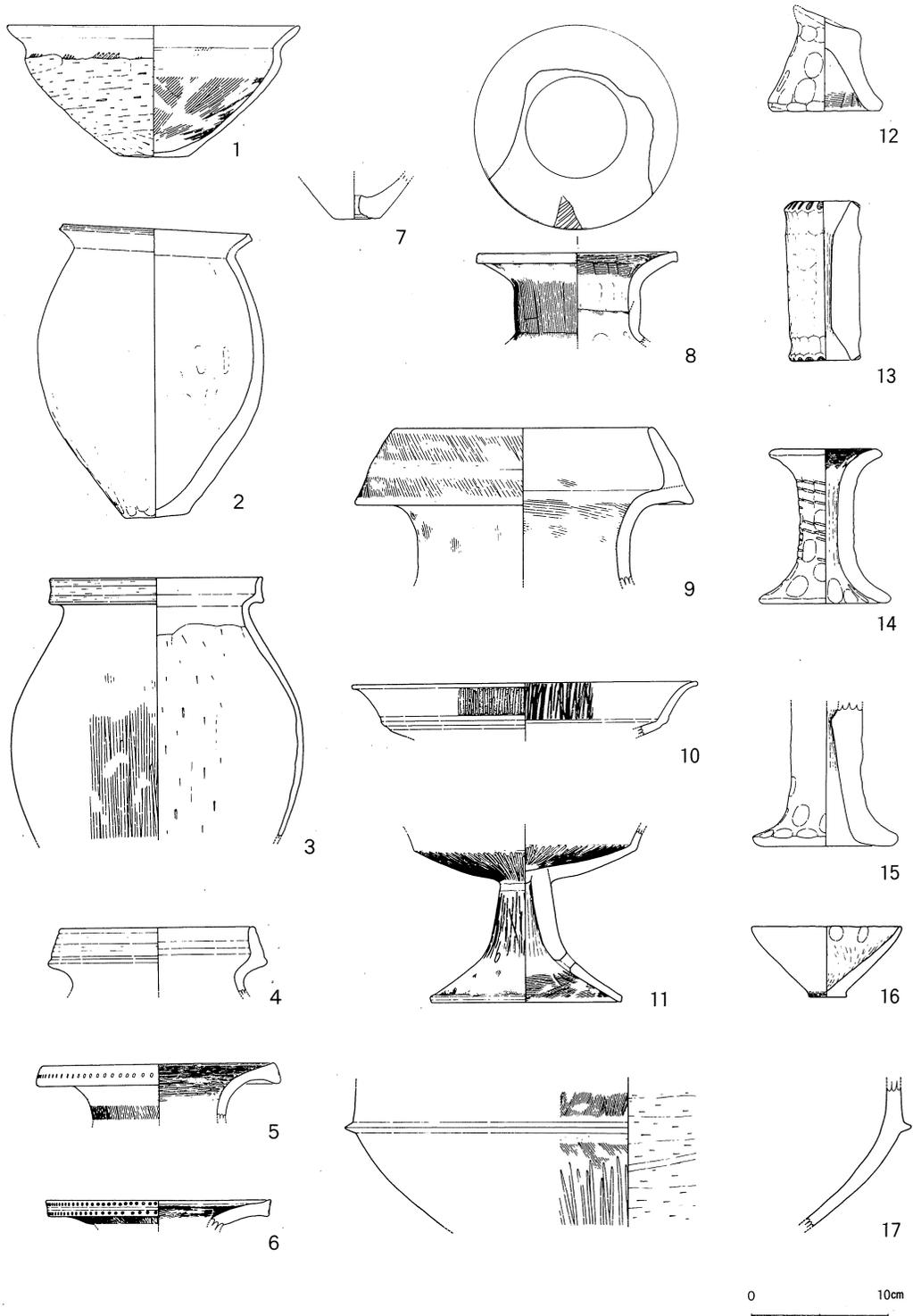
第19図 SK-01平・断面図

から、箱式石棺墓坑から出土した土器群と比べるとやや新しい段階のものであり、この場所が墓域として確立していたことが考えられる。また、蓋として別の大型土器が用いられているが、一部分しか検出されておらず器形などは不明である。壺棺内の埋土は下から、暗黒色粘性土・暗灰色粘性土・暗灰色砂質土・暗黒色砂質土・明灰色砂質土の順に堆積しており、これまでの幾つかの例と同様に副葬品等は全くみられなかった。

この大型の壺は淡灰褐色を呈しており、胎土には1~2mm程の石英と長石を多く含み、焼成は良好であるが、一部に大きな黒斑が認められる。外面はハケ目を施したのち縦方向のヘラミガキ、内面はハケ目を施したのちユビナデで調整している。また、底部と体部上方の輪積み痕が認められる部分に指頭圧痕を粗く残す。体部下方には、外側から穿たれた $16 \times 21\text{mm}$ の随円形の孔(A)と、その逆側に内側から穿たれた同様の孔(B)が認められ、A孔からB孔へ貫通したものと考えられる。小児壺棺に一個所だけ穿孔されたものは、この地区に多くみられるが、このような例は聞かない。(第43図参照)

これまでにこの地区で確認された小児壺棺は、いずれも頸部から上が埋葬時に取り除かれており、この穿孔についても、箱式石棺墓周辺で埋葬直前に行なわれたとみられる葬送儀礼と共通した作業が、これらの小児壺棺墓周辺でも行われたのではないと思われる。

(註)「普通寺市の古代文化」普通寺市・1973 第三章の四・弥生時代の墓制で、壺の頸部から上を打ち欠き、体部に穿孔した例が紹介されている。
「彼ノ宗遺跡発掘調査報告書」普通寺市教育委員会・1985 彼ノ宗遺跡では15基の小児壺棺が検出され、同様の例が多く確認されている。
また小児の歯・骨が出土している。



第20图 仙遊遺跡出土遺物実測图 (1/5)

④ 出土遺物

仙遊遺跡出土弥生土器観察表

番号	出土位置	器形	胎土	焼成	色調	備考
1	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	鉢	石英砂多 長石砂	普通	明褐色	外面はタクキののちへら削り、内面はハケ目を施したのちナデで調整。 口縁端部は横方向にナデで調整。
2	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	甕	石英砂多 長石砂	良	暗灰褐色	外面は縦方向に調整痕(へらミガキ?)、内面は底部に指頭圧痕をわずかに残す。
3	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	甕	石英砂多 長石砂	やや良	淡褐色	外面は縦方向のへらミガキ、内面は縦方向のへら削りで調整。 口縁端部は横方向にナデで調整。
4	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	甕の口縁部	石英砂多 長石砂	やや良	淡褐色	口縁端部は横方向にナデで調整。
5	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	壺の口縁部	石英砂少 長石砂	良	淡灰褐色	外面は頸部に縦方向のハケ目を施したのち、上部を横方向にナデで調整。 内面は横方向のへらミガキ。端部は横方向にナデたのち刺突文を施す。
6	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	壺の口縁部	石英砂少 長石砂	良	淡褐色	外面は縦方向にへらミガキ、内面は横方向のハケ目を施したのちナデで調整。 端部は横方向にナデたのち、平行二列の竹管文状の刺突文を施す。
7	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	壺の底部	石英砂多 長石砂	良	淡灰褐色	外面はナデで調整、内面にはへら削りが認められる。 焼成前に底部中央に穿孔されている。
8	廃土中	壺の口縁部	石英砂少 長石砂	良	淡灰褐色	外面は縦方向のハケ目で、内面は横方向のハケ目で調整。 頸部は輪積み痕と指頭圧痕が内面に認められる。端部は横方向にナデで調整。 口縁部内面にはへら描き文様が認められる。
9	廃土中	壺の口縁部	石英砂多 長石砂	良	明灰褐色	外面・内面ともにハケ目を施したのち、ナデで調整。
10	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	高坏の口縁部	石英砂少 長石砂	良	淡灰褐色	外面は横方向のナデののち、縦方向のへらミガキで調整。 内面は縦方向のへらミガキで調整。
11	箱式石棺墓坑 (埋土下層)	高坏の脚部	石英砂少 長石砂	良	淡灰褐色	脚部外面は縦方向にハケ目で調整したのち、ナデでさらにへらミガキを施す。 脚部内面は横方向のハケ目で調整、孔は三個所に認められる。 器部は外面・内面ともに縦方向のへらミガキを施す。
12	廃土中	支脚	石英砂多 長石砂	やや良	暗灰褐色	外面には粗い指頭圧痕、内面には横方向のハケ目による調整が認められる。
13	廃土中	器台	石英砂多 長石砂	良	明灰褐色	上下に指頭圧痕によるくびれが認められる。また、上下端部には刺突文が連続的に施されている。
14	廃土中	器台	石英砂多 長石砂	普通	淡褐色	指頭圧痕を残す、粗いつくりのものである。
15	廃土中	器台	石英砂多 長石砂	良	暗灰褐色	タクキののち指で調整。上部内面にのみ横方向のハケ目が認められる。
16	廃土中	小鉢	石英砂多 長石砂	良	暗灰褐色	手づくねの土器で、内面にはナデ、端部に指頭圧痕が認められる。
17	廃土中	特殊壺の体部	細角閃石砂多	良	乳灰褐色 (内面)	外面は、突帯から上には縦方向のハケ目、突帯から下には縦方向のハケ目ののちへらミガキが施されている。内面は横方向のへら削りによって調整。 外面は丹塗りによって、鮮かな朱色を呈する。丁寧なつくりである。

第四章 ま と め

旧練兵場遺跡・仙遊Ⅰ地区で発見された箱式石棺墓は、墓坑から出土した土器などから弥生時代後期後葉のものとみられる。そして調査結果から、大きく掘られた墓坑の内部、若しくはその周辺で、収集してきた石材に線刻画を描き、これを加工する作業が、葬送に伴う呪術的意味をもって行われたことが考えられ、石棺石材に線刻された図文の内容と併せて、極めて貴重な資料であることがいえる。

この箱式石棺の石材には多種多様な文様が認められる。中には意味不明の線刻もあるが、同様の図形が複数存在し、その内容から幾つかのグループに分類できることから、意図的に描かれた図文であることがうかがえる。弥生土器にヘラ描きの絵を施した例は、しばしば発見されており、中にはこの石棺に描れた図文と類似したものもあるが、ここで取り扱うものは、いずれも弥生時代後期後葉に登場する特殊文様であり、呪術的な性格の色濃いものであるため、通常の絵画的性格をもったものとは分けて考える必要がある。

ここでは、まとめとして幾つかの類例をあげて比較することで、これらの図文の持つ意味について考えてみたい。

まず、ひときわ目を引くのが石材9に描かれた人面文である。表現の中心は目に置かれており、鼻や口の表現はやや曖昧であるが、両耳は比較的はっきりしている。顔の入れ墨についても目を基調に施されており、この人面文の周囲にも目だけの表現らしいものが多く認められる。また、石材2の内面にも人面文が認められるが、これは顔の輪郭と目だけの表現であり、やはり人面文は目が呪的な力を発揮するようである。具象図形では他にも、石材7外面に描かれた鳥の線刻が認められる。

次に石材1（脚石）内面に大きく描かれている扇形図形に注目したい。これは、その細部まで念入りに描写されているようであり、下方に描かれた槍先状の図形と併せて、何か呪的な性格を持った構造物を写し取った具象図形であるのかも知れない。また、この上方には扇形の図形と一部重ねて直弧文系の図文が描かれている。

他にみられるものはいずれも抽象図形で、多数の直線を平行に並べたものが多く、中には一定方向に広がるものと、片側が閉じて扇形を呈するものがある。また同様に、多数の弧線を平行に並べたものがあり、やはり一定方向に広がるものと、片側が閉じて猛禽類の嘴のような形を呈するものがある。この図文A・Bのグループについては、ここでみられる他の様々な文様の原単位となっているようであり、これらの組み合わせによって複雑な文様が構成されている。石材4（額石）内面には複数の図文B-3が克明に描かれている他、このA・B系の図文が多数重なっている。また、この石材の外面には直弧文系の図文と綾杉文が比較的まとまりを持って描かれている。

箱式石棺の石材には、他にも、大きく弧線を描き連ねたものや小型の円文、そして意味不明の線条が多数あり、今後も更に細かい分類・分析に努めたい。

ここまでの類例をみていくと、石材9の人面文と酷似した例が愛知県安城市にある。安城市の地形は、矢作川によって形成された洪積層中位段丘面と、沖積層底地の上下二段の平坦面からなり、台地沿いの沖積低地に弥生遺構が点在しており、その中に亀塚遺跡・東上条遺跡がある。亀塚遺跡では傾斜した微高地の末端部から人面文を施した壺形土器が、^(註1)東上条遺跡では人面文を施した球形土製品が出土しているが、この二例は、仙遊遺跡との距離を全く感じさせぬ程、その表現が似ている。

同様の、入れ墨を施した人面文は岡山県にも類例が認められる。総社市の一倉遺跡では、^(註3)住居を取り囲む弧状の大溝から人面文を施した小鉢が、岡山市の岡山大学構内遺跡では、^(註4)集落内の井戸から人面文を施した高坏が出土している。この高坏には2つの人面文と幾種類かの図文の組み合わせがみられるが、同様の図文の組み合わせによる使用例が、総社市三輪の宮山墳丘墓周辺で出土した器台形土器にも認められる。^(註3)この器台形土器の例は、石材9の人面文がその背後に図文A-3を重ねて使用している点と類似している。石材9の線刻は同一面に幾重にも重ねて施されているが、この石材にみられる人面文と図文A-3は一連のものであり、明らかに意図的に組み合わせられていることがわかる。

このような、人面文と特殊文様の組み合わせによる使用例は、倉敷市矢部向山にある著名な弥生時代後期末の墳丘墓・楯築遺跡でも確認されている。^(註5)この墳丘上には御神体として祭られている「亀石」があり、これには人面文と弧帯文が立体的に削り出されているが、石材5内面にみられる文様中に、楯築遺跡の弧帯文と共通した表現がある点に注目したい。

次に石材7外面の鳥の線刻については、古墳時代には死者の魂の運搬者としてよく登場するが、西日本の弥生遺跡では木で作った鳥の発掘例が多く、鳥を用いる習俗が稲作と伴に出現することが知られている。これと人面文の組み合わせ例に類似したものでは、島根県出土とされる邪視文銅鐸に大きな目と鼻、そして下方に鳥を鋳出したものがあり、稲魂を祭る祭器ではないかと考えられている。^(註6)また、直弧文系図文との組み合わせ例では、奈良県桜井市纏向遺跡の石塚古墳周濠出土の木製弧文円板と鳥形木製品の例がある。^(註7)

鳥杆という習俗があるが、これは鳥形を葬屋の上に立てるものであり、日本の民俗例では木の人形との組み合わせによって、鳥形が邪悪な侵入者（悪霊）を見張り、人形がこれを撃退するというものである。仙遊遺跡でみられる人面文と鳥の線刻も、これと近い意味を持っているように思われてならない。

最後に県内の類例をあげると、まず市内では、同じ旧練兵場遺跡から出土した器台形土器の破片に、図文A-2に類似した図文が認められる。^(註8)また、岡古墳群中に所在する「山の神シスト」と呼ばれる箱式石棺の蓋石には、無数の線条からなる線刻画が施されている。^(註9)^(註10)

高松市に所在する鶴尾神社4号墳（積石の前方後円墳）では、石室内や石室周辺の墳丘上からヘラ描文様を施した壺の破片が多数出土しており、その文様の中には仙遊遺跡の箱式石棺の線刻画と共通したものが多く認められる。^(註11)仙遊遺跡出土の土器は鶴尾神社4号墳出土の土器よりもやや古い時期に比定されるものであり、両者の関連が注目される。

ここで紹介したものは全て、広い意味での境界における祭祀に用いられた呪術的文様ではないかと考えられる。境界には様々なものがある。国の内と外・集落の内と外・墓の内と外（死者の世界と生きる者の世界）などであり、こうした性格の異なった境界を鎮めるために、図文の組み合わせ方や図文が施された対象が異なるのかも知れない。境界の最小単位では人間そのものの内と外が考えられ、その体に施される線条による入れ墨自体が、そういった呪文であるとも言える。『魏志倭人伝』にあるように「黥面文身」によって、その肉体に災いが及ぶことを祓うと考えたならば、箱式石棺を線刻画で覆うことで、被葬者に対して同様の効果を期待したのかも知れない。実際にA・B系の図文と、人面文にみられる入れ墨の線条はよく似ている。

すなわち、この箱式石棺の線刻画は被葬者に対する守護・鎮魂的意味を持って、あるいは、封鎖を目的として施されたものであり、後の古墳時代に登場する装飾古墳との関連にも意味深いものがある。この周辺には丸亀平野だけでも、市内の宮が尾古墳をはじめとして10基程の後期古墳に線刻画が確認されている。仙遊遺跡の箱式石棺は、全国的にみても最も古い直弧文系図文によって装飾された墓であり、このように墓に呪的な線刻による装飾を施すという習俗が弥生時代後期には成立していたとも考えられるが、この地方では古墳時代後期までの時間を埋めることのできる資料は無く、またこうした習俗の伝播についても、今後更に多くの類例を調査し比較・分析することで再考したいと思う。

また、旧練兵場遺跡・仙遊I地区を墓域とみるならば、周辺に同種の遺構が広がる可能性が高く、この周辺を含めた今後の調査にも大きな期待が寄せられる。

註1 「愛知県亀塚遺跡の人面文土器」『考古学雑誌』第67巻第1号 1981・天野暢保

また、天野暢保氏から貴重な資料の提供と御教示をいただいた。

註2 「上条遺跡群東上条地点出土の人面文球形土製品」『安城市歴史研究』第9号（安城市教育委員会）

1983・谷 悟 また、天野暢保氏から貴重な資料の提供と御教示をいただいた。

註3 総社市教育委員会高田明人氏から貴重な資料の提供と御教示をいただいた。

註4 岡山大学埋蔵文化財研究室山本悦世氏から貴重な資料の提供と御教示をいただいた。

註5 「楯築遺跡」山陽新聞社 1980・近藤義郎

また、近藤義郎氏から貴重な資料の提供と御教示をいただいた。

註6 「古代の顔」福岡市立歴史資料館 1982

註7 「纏 向」橿原考古学研究所編 1976・石野博信 関川尚功

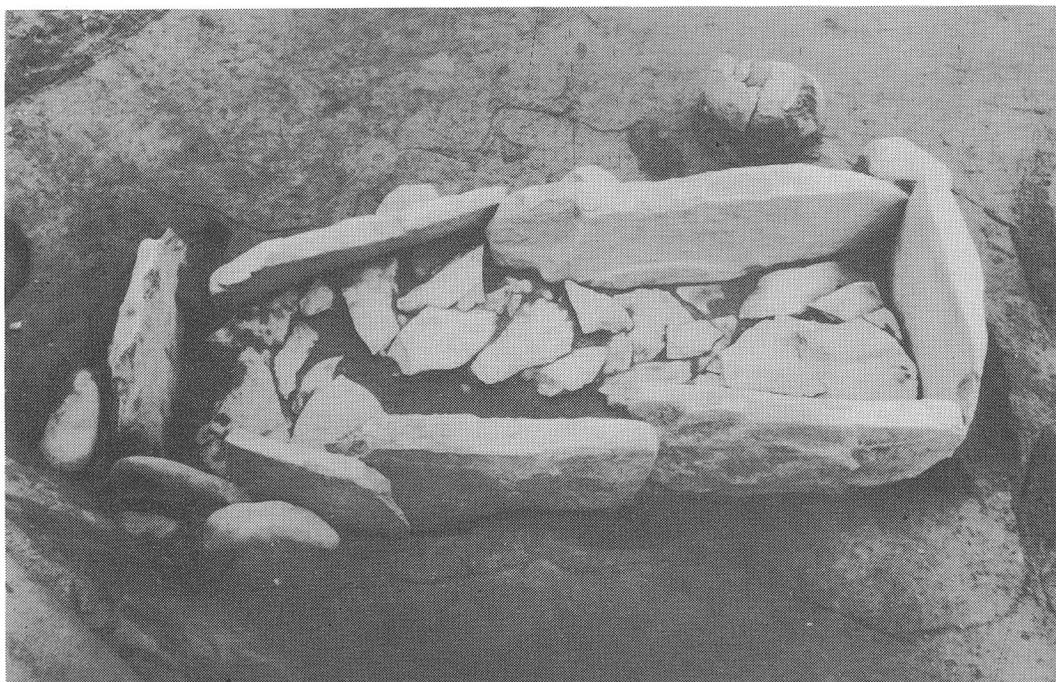
註8 善通寺市立郷土館蔵

註9 第2図参照。ここに群集する後期古墳には線刻画による装飾を施されたものが多い。

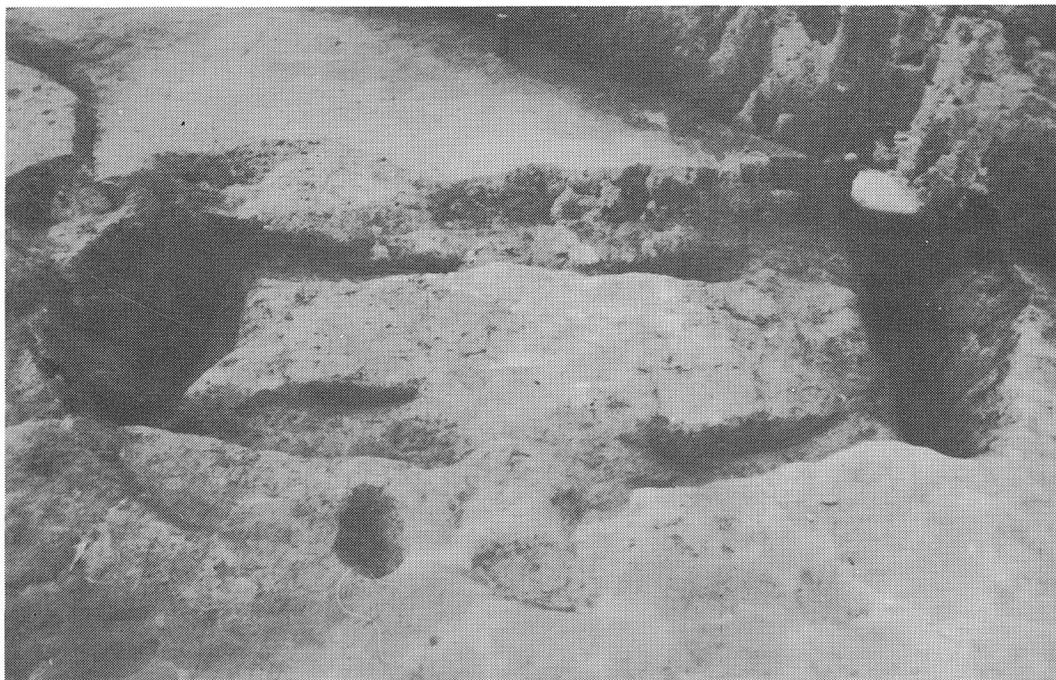
註10 この箱式石棺は古墳時代のものと考えられる。

註11 「鶴尾神社4号墳調査報告書」高松市教育委員会 1983

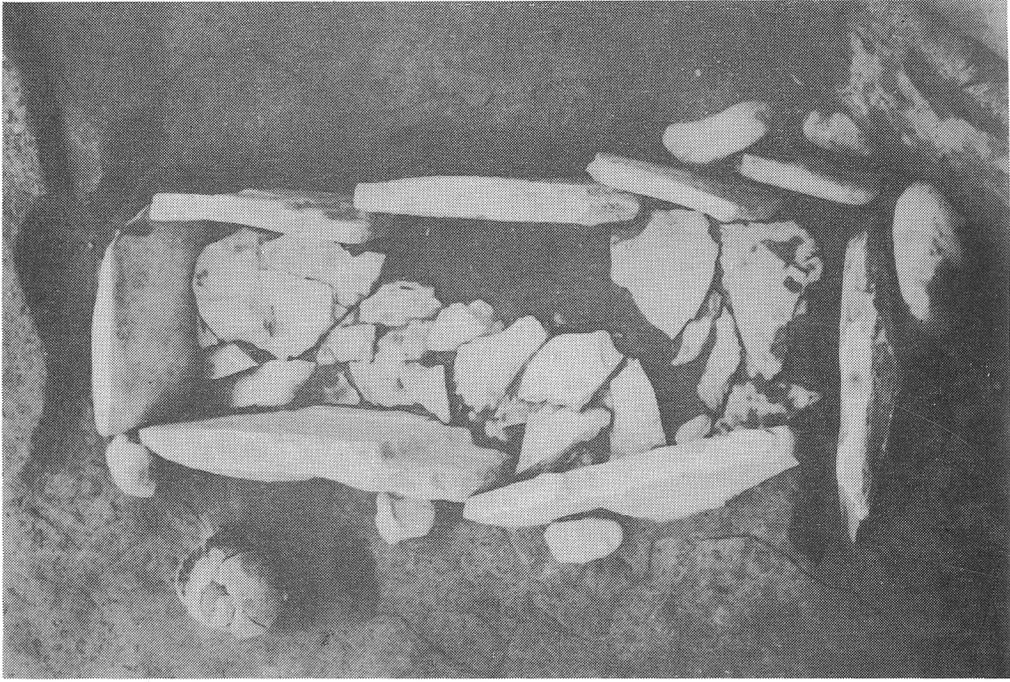
版 圖



第21図 1号箱式石棺（西から）



第22図 1号箱式石棺墓の掘り方（東から）



第23図 1号箱式石棺（北から）



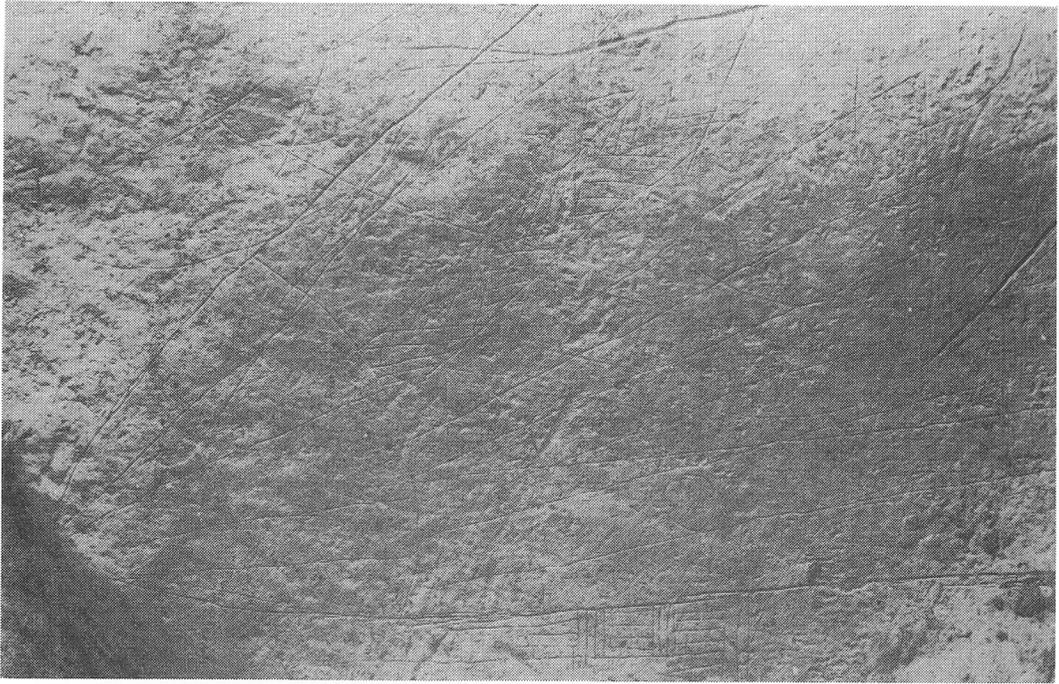
第24図 1号箱式石棺墓の掘り方（南から）



第25図 石材9の線刻画



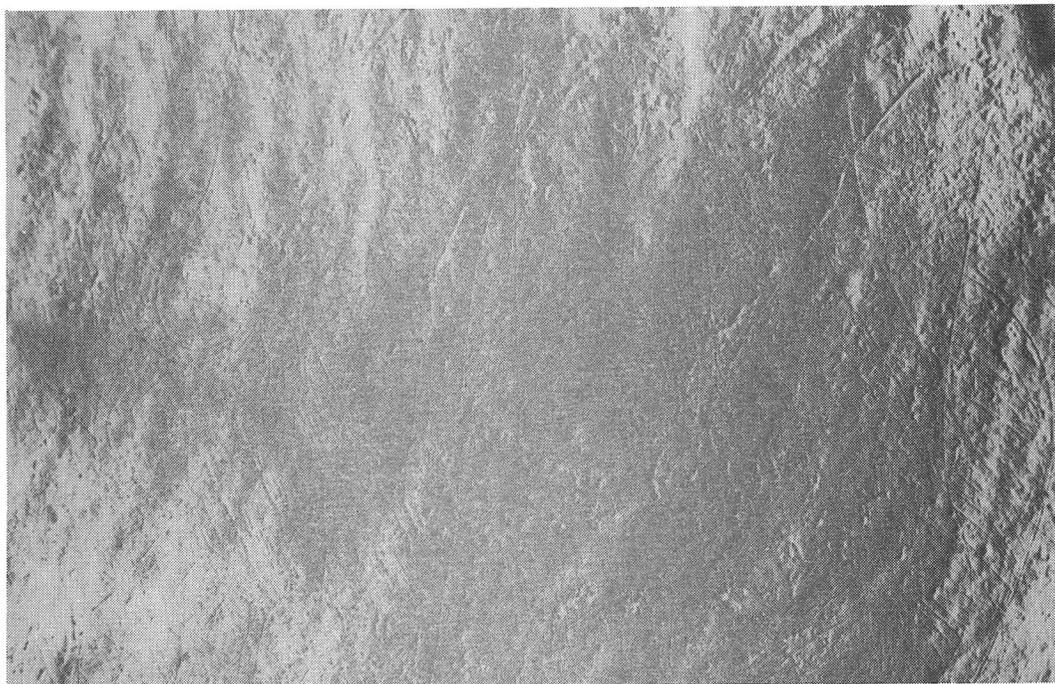
第26図 石材5内面の線刻画



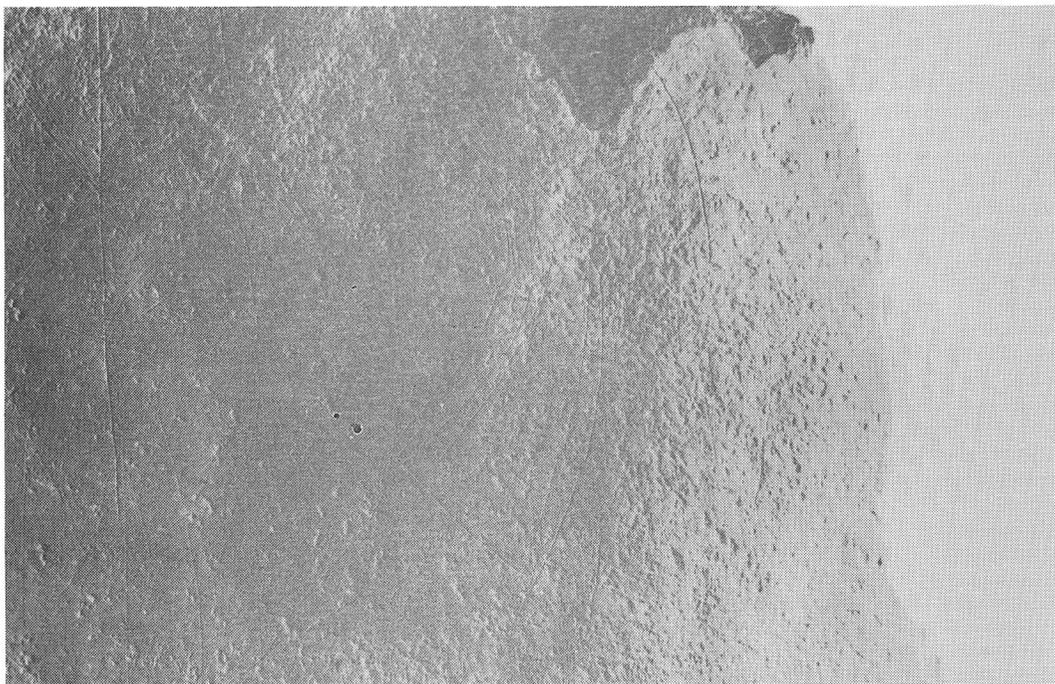
第27図 石材1内面の線刻画



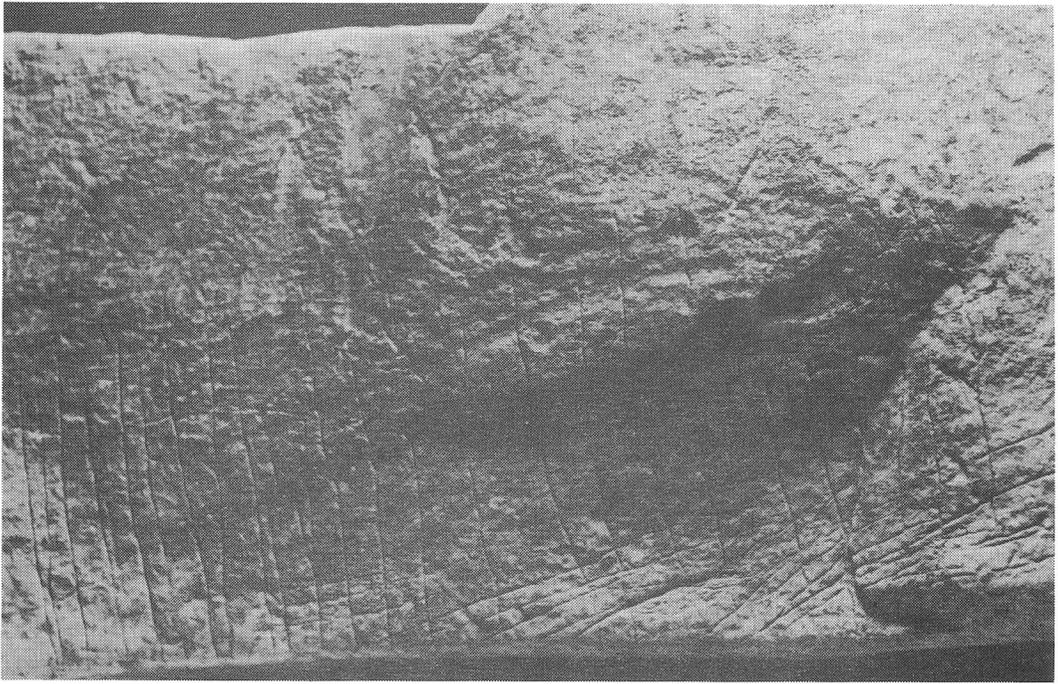
第28図 石材1内面の線刻画（右が上）



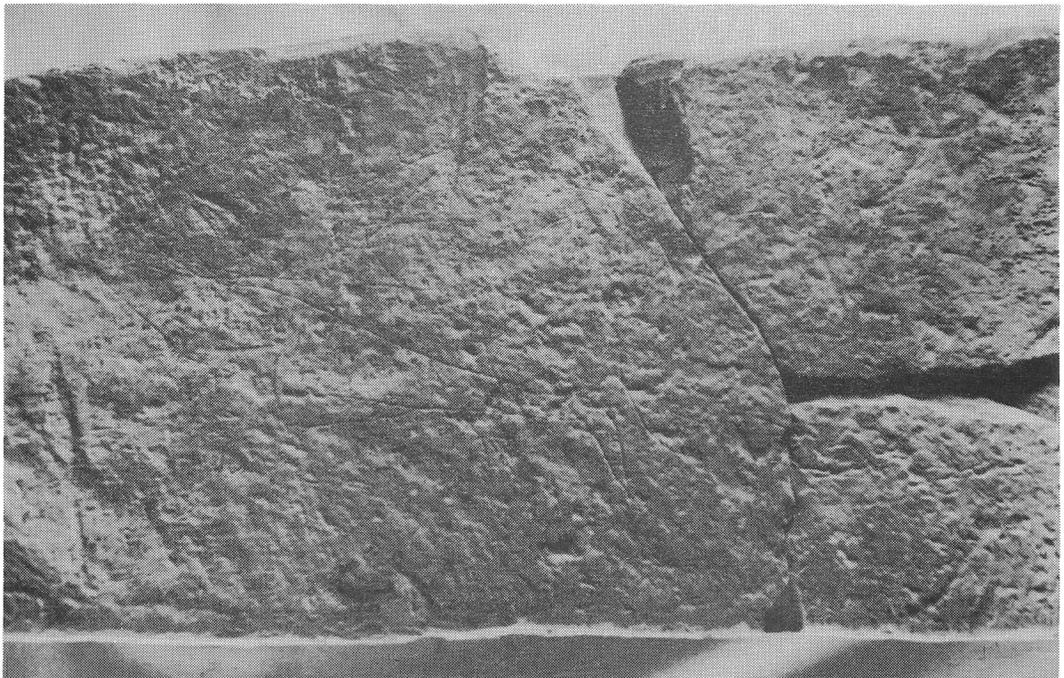
第29図 石材4外面の線刻画



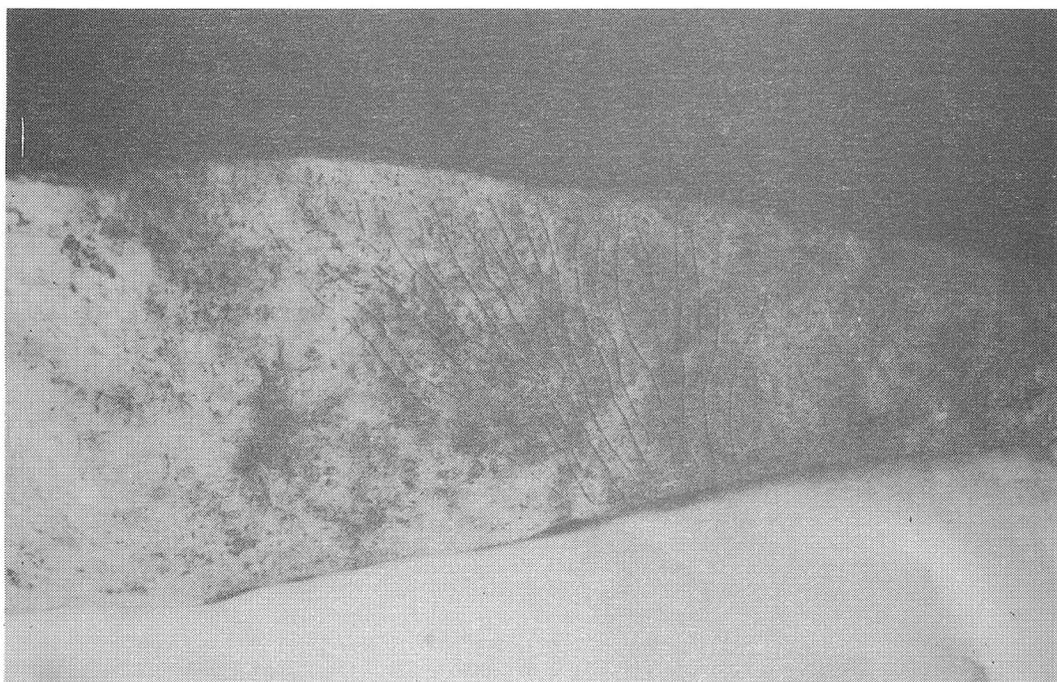
第30図 石材4内面の線刻画



第31図 石材2内面の線刻画



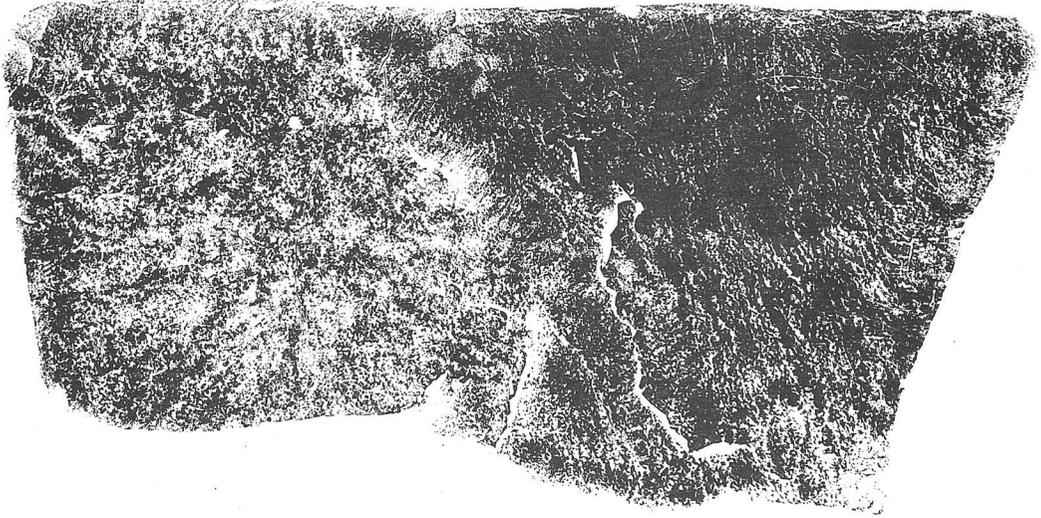
第32図 接合状態での石材2外面と石材7外面(左)と掘り方出土の石片(右上)の線刻画



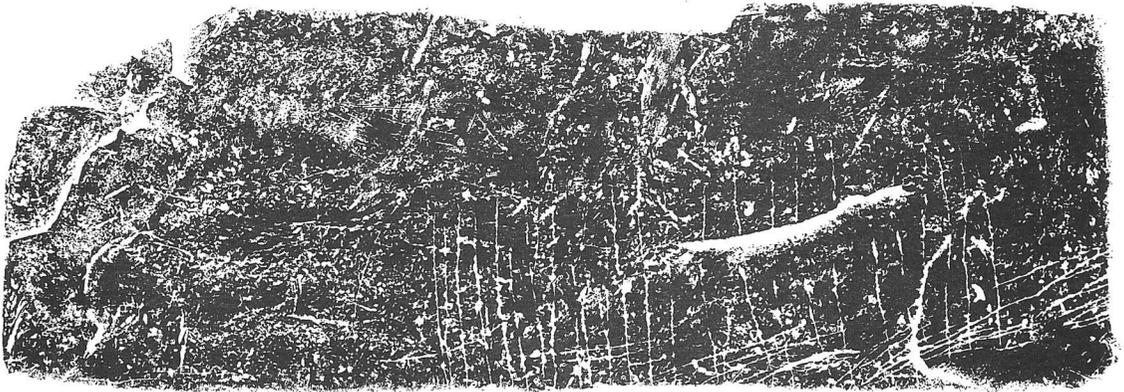
第33図 石材3下面の線刻画



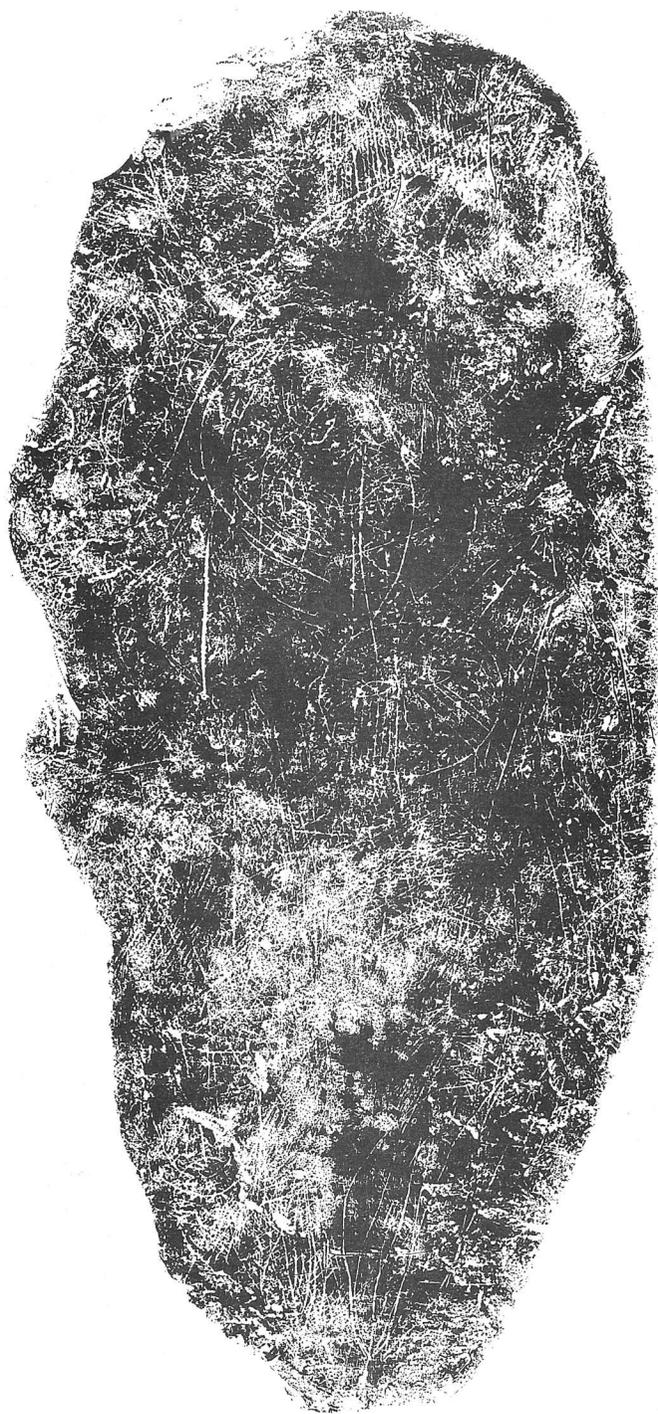
第34図 1号壺棺墓の検出状況（北から）



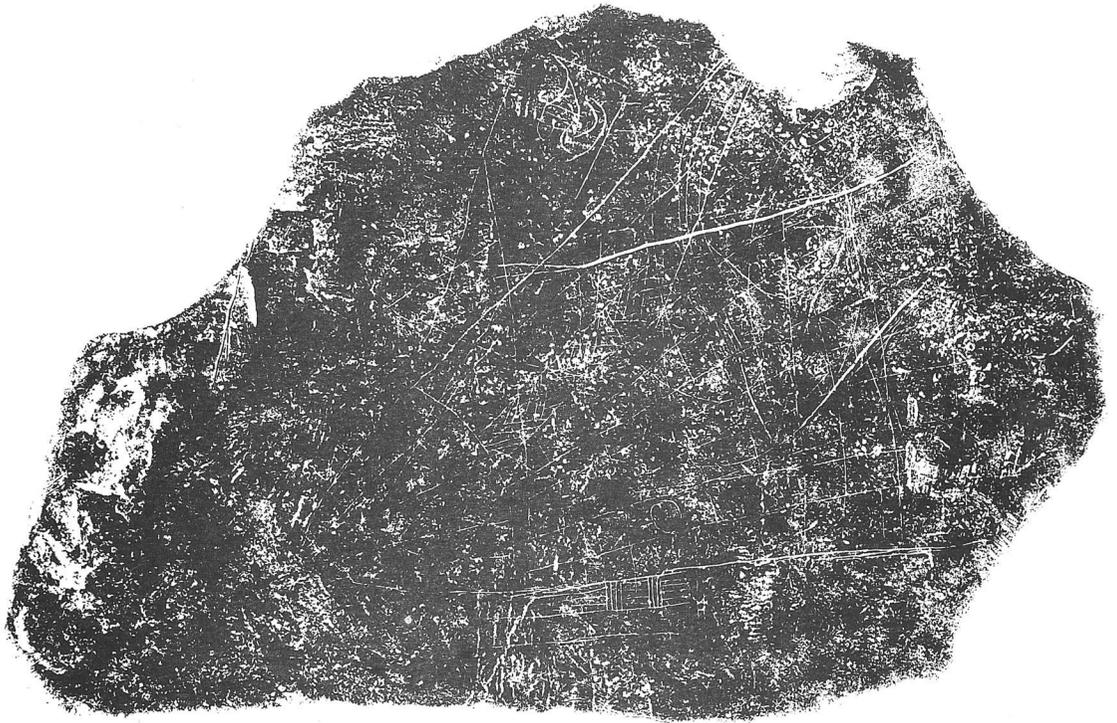
第35图 石材5内面拓影 (1/5)



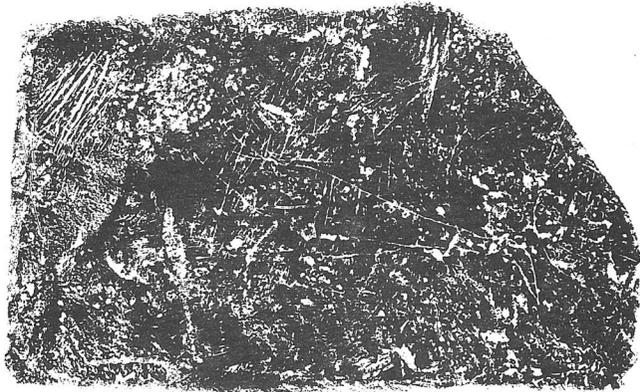
第36图 石材2内面拓影 (1/5)



第37图 石材9拓影 (1/5)

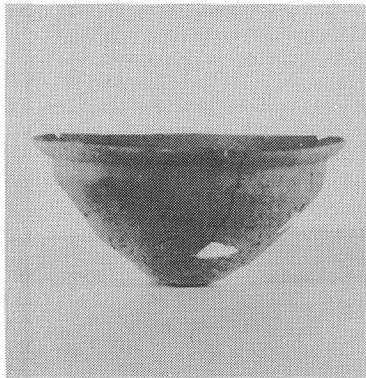


第38図 石材 1 内面拓影 (1/5)

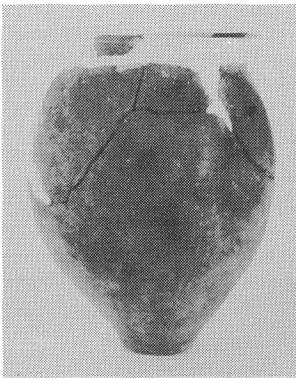


第39図 石材 7 外面拓影 (1/5)

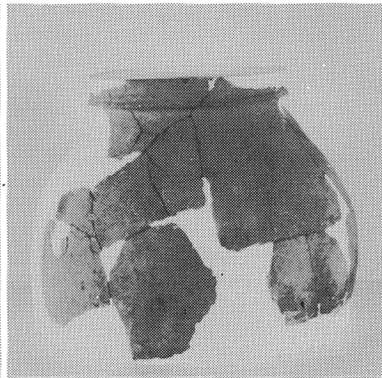
図 版



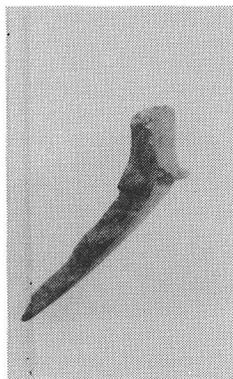
第20図-1



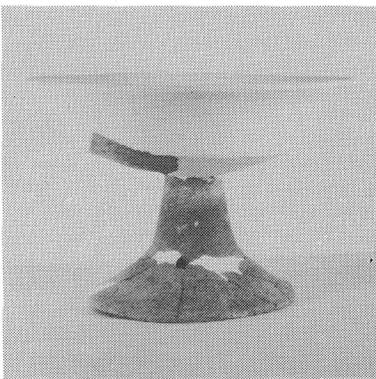
第20図-2



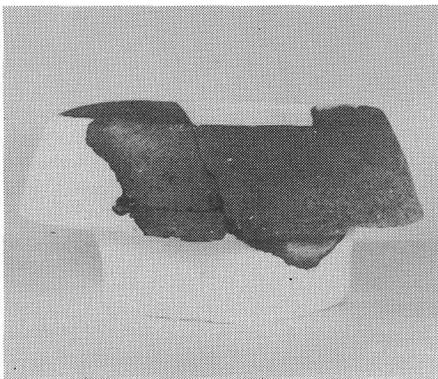
第20図-3



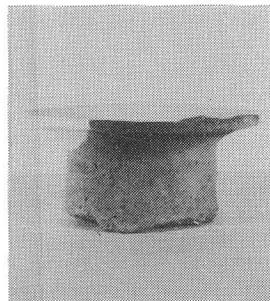
第20図-17



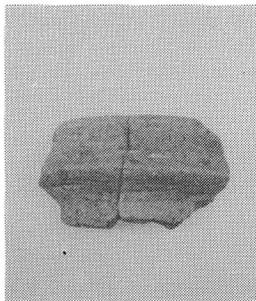
第20図-11



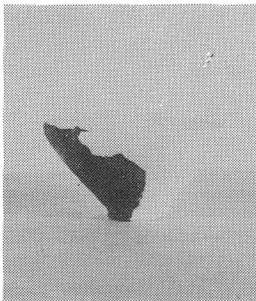
第20図-9



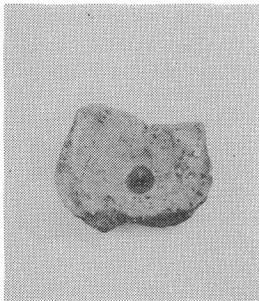
第20図-8



第20図-4



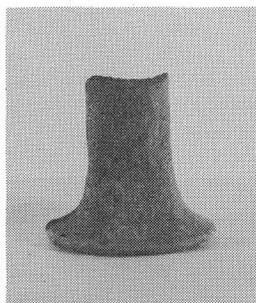
第20図-16



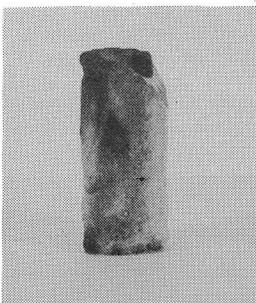
第20図-7



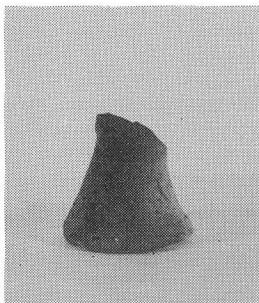
第20図-14



第20図-15



第20図-13

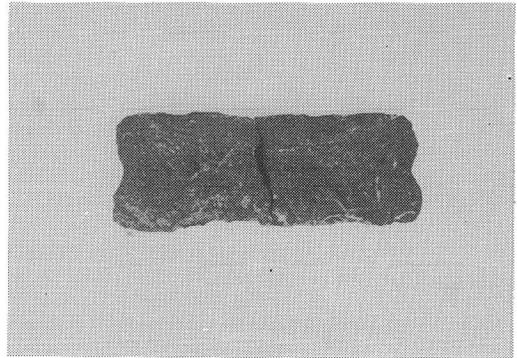


第20図-12

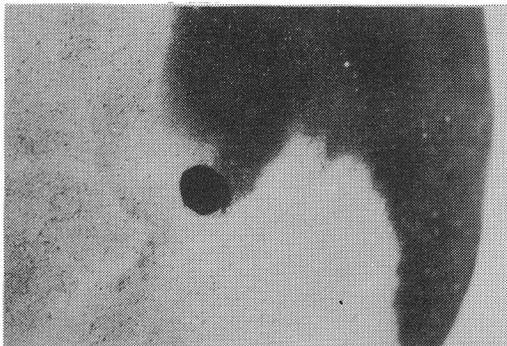
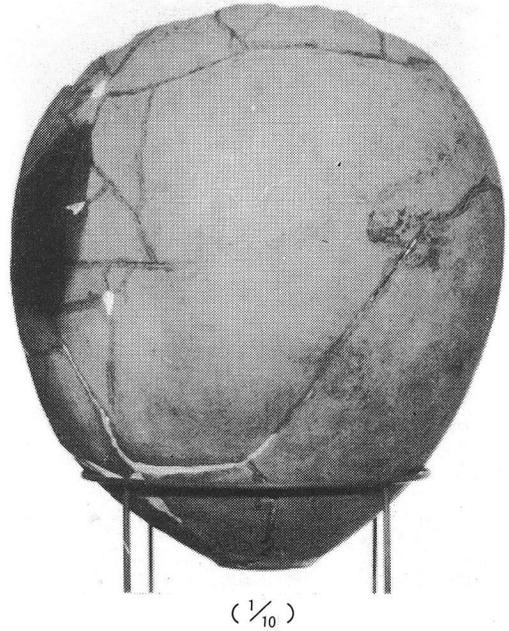
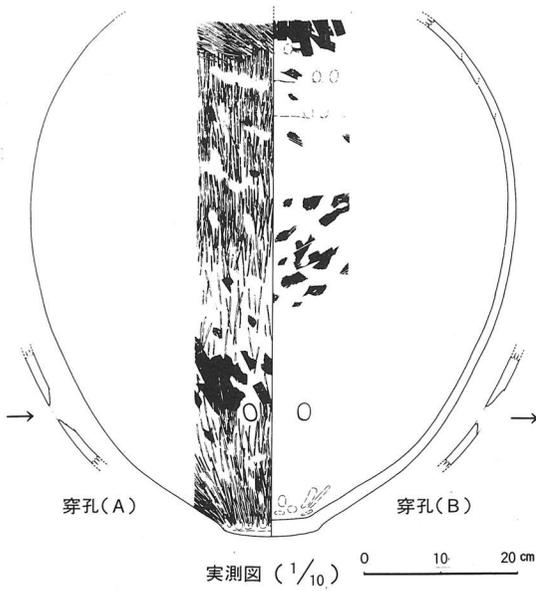
第40図 仙遊遺跡出土遺物 (1/5)



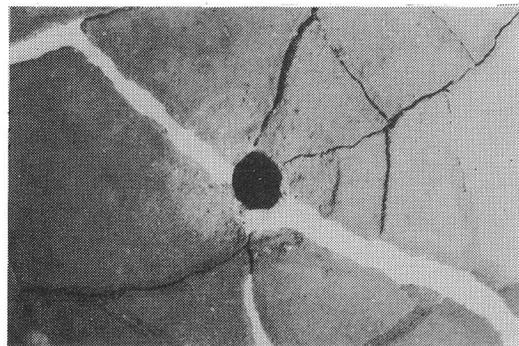
第41図 壺形土器口縁部内側の線刻(第20図-8)



第42図 サヌカイト製石包丁・
箱式石棺墓坑埋土下層出土 (1/2)



穿孔(A)



穿孔(B)

第43図 1号壺棺

仙遊遺跡調査報告書

昭和61年3月31日発行

編集・発行 善通寺市教育委員会
善通寺市文京町二丁目1番1号

印刷所 ㄝ 力 ㄥ 印刷